
2016年度
熊本地震で被災した子どもの支援活動助成
報告書



公益財団法人
ベネッセこども基金

「熊本地震」で被災した子どもの 支援活動助成

2016年4月の熊本地震発生を受けて、被災した子どもたちの支援活動に対する助成を実施しました。緊急性を重視し、申請を受け付けたものから随時審査を行い、支援対象を決定していきました。また、すでに実施済みの事業をさかのぼって申請することも可としました。

特に、病気や障がい、その他で生活上の困難を抱える子どもや、被災によるストレスや学習困難などを抱える子どもを対象とし、緊急性のある事業を優先するため、「すでに活動をスタートしている」もしくは「具体的な活動の目的がすでについている」活動であることを条件としました。

本報告書は、熊本地震発生～2017年3月31日までに実施された37事業の活動報告となります。

- ・募集期間：2016年5月9日～6月10日
- ・助成対象期間：「熊本地震」発生以降～2017年3月31日
- ・助成総額：2,000万円以内
- ・応募数：83件
- ・採択事業数：38件
- ・助成金額合計：18,825,899円

※被災地の環境変化の影響を受け、申請事業の未実施・縮小などが生じたことによる助成金の返納もありました。

第1回決定分（6月2日発表） 助成事業一覧

ページ	団体名	所在地	申請事業名	活動地域
2	一般社団法人 ATHLETE SAVE JAPAN	東京都	「熊本地震」で被災した子どもの支援活動助成	益城町・南阿蘇地区
3	特定非営利活動法人 アレルギーを考える母の会	神奈川県	避難所などで食物アレルギーの子どもを誤食事故から守る「災害時用ビブス」を配布・活用する事業	熊本県内
4	特定非営利活動法人 絆プロジェクト2030	東京都	積み木&絵本・笑顔プロジェクト2016	熊本県内
5	特定非営利活動法人 くまもとスローワーク・スクール	熊本県	熊本地震益城町就学前母子ケアプログラム	益城町
6	子どもの心と身体の成長支援ネットワーク	東京都	親子遊びの広場	熊本県内
7	特定非営利活動法人 ななうらステーション	熊本県	笑顔の花を育もう	益城町・阿蘇地区
8	認定特定非営利活動法人 日本クリニックラウン協会	大阪府	クリニックラウン熊本支援事業	熊本県内
9	公益社団法人 日本助産師会	東京都	熊本地震被災母子支援活動（助産師による避難所巡回）	熊本市、益城町、西原町
10	公益社団法人 日本助産師会	東京都	熊本地震被災母子支援活動（母子向け専用避難所の運営）	熊本市
11	特定非営利活動法人 フリー・ザ・チルドレン・ジャパン	東京都	くまモンプロジェクト ～小児病棟で病気や治療と向き合う子どもを応援しよう～	熊本県内
-	よりそいの花プロジェクト	石川県	益城町幼児・児童の心のケアプロジェクト	益城町

「熊本地震」で被災した子どもの支援活動

◎ 事業の目的

益城町・南阿蘇地区で避難所、仮設住宅の生活を送っている方々に対して、弊社団の持つ「アスリート」という資源を生かし被災者と触れ合ったりスポーツをすることで少しでも健康面やメンタル面を支援すること。

◎ 事業内容と活動経過

2016年度は計4回熊本を訪問

- ①4月28日（ロアッソ熊本の巻誠一郎選手が同行）
支援物資（毛布・マットなど）をお届け、大黒摩季さんとのコラボによる炊き出し、綿菓子の配布
- ②6月20日・21日（ロアッソ熊本の巻誠一郎選手が同行）
アスリートによる避難所・幼稚園・小学校・サッカースクール訪問（給食時同席、サッカー交流、パフォーマンス披露、プレゼント手渡し）
- ③11月8日・9日（ロアッソ熊本の巻誠一郎選手が同行）
アスリート・アーティストによる幼稚園・小学校・大学訪問（サッカー交流、AED寄贈、いのちの教室開催、電子ピアノ寄贈など）
- ④12月21日
アスリートによる児童養護施設訪問（クリスマスプレゼントの手渡し…楽天コラボ）

◎ 事業の成果

達成できた点：

- ・短い時間で多くの避難所や学校を訪問できた。
- ・被災直後に本当に必要なものをお届けできた。
- ・多くの子どもたちの笑顔を見ることができた。

残された課題：

- ・大人に対して我々ができることが何かを考えていく必要性。
- ・本事業を継続していくための資金調達。

◎ 課題および展望

4回の訪問で多くの被災者の方とつながりを持つことができ、現在でもSNSを通じて交流している。

被災地の方々と頻繁にお会いすることはできないが、支援活動を行いアスリート・スポーツを通じて現地の方に少しは元気を与えられたのではないかと感じている。

また、今回の活動をきっかけに巻選手を中心に熊本の子どもたちのために新たな取り組みを行う準備を進めており、今後は、昨年までの取り組みを継続するための資金調達と新たな取り組みを形にして被災された皆さんを元気にしていく「仕組づくり・組織づくり」が重要になると考えている。



カベッサ熊本の子どもたちとのサッカー交流：リフティングパフォーマンス披露、ボールなど購入品を寄贈。（ドリブルデザイナー 岡部将和、元コンサドーレ札幌 砂川誠）



山西小学校の子どもたちと給食を共にし、その後サッカー交流（巻誠一郎、インディ鈴木、砂川誠）



西原保育園の子どもたちにリフティングパフォーマンスを披露（インディ鈴木）

避難所などで食物アレルギーの子どもを誤食事故から守る 「災害時用ビブス」を配布・活用する事業

事業の目的

災害時には慢性疾患患者への配慮が求められる。東日本大震災の被災時、避難所などでアレルギー疾患患者への配慮がなされず、食物アレルギーの子どもが空腹に耐えかねて、あるいはボランティアからもらったなどで本人のアレルゲンとなる食べ物を食べ、命に係わる重篤な症状（アナフィラキシー・ショック）を招いた事例もあった。「熊本地震」被災地域でもそうした事態が懸念されたことから、自分では説明できない子どもに着せ、食物アレルギーで食べられない物があることを周囲に知らせる「災害時用ビブス」を、必要があり希望する子どもに保護者などを通じて配り、誤食事故を防止し子どもたちの命を守る。併せて長引く避難生活、がれきの片付けなどでホコリが舞う環境で悪化が懸念される喘息やアトピー性皮膚炎、鼻炎・結膜炎などのアレルギー疾患患者が配慮される環境づくりに取り組む。

事業内容と活動経過

災害時には、アレルギー疾患など慢性疾患で困っている人がいることを被災者支援にあたる行政職員や避難所運営に携わる方々に理解していただく取り組みから始まる。当会は東日本大震災の経験を踏まえ、そうした方々の理解を求める資料（日本小児アレルギー学会作成「災害時の子どものアレルギー疾患対応パンフレット」など）の提供と合わせ、「災害時用ビブス」を被災自治体の保健師や栄養士、現地医療機関の専門医などを通じて配布し活用を呼びかけることなどを通じて、配慮を要する人への理解を広める取り組みを行っている。4月24日～26日、5月4日～6日、8月1日～3日、12月6日・7日にかけて熊本県、熊本市、宇城市、宇土市、阿蘇市、益城町、大津町、御船町、嘉島町、南阿蘇村、西原村の災害対策本部、避難者支援の拠点となる市町村の保健センター、避難所、被災地域から患者がアレルギー専門医を受診に訪れる国立病院機構熊本医療センター、熊本地域医療センターなどを繰り返し訪れ、本事業で作成したビブス313着を届けた。また事業で生まれた連携を通して要請される個々の患者の支援などに取り組んでいる。

事業の成果

発災から間もない4月24日～26日および5月4日～6日に訪れた、特に被害が大きかった益城町、南阿蘇村、西原村などは災害急性期といえる段階で、「とてもアレルギーまで手が回らない」という状況が担当者の様子からうかがえた。そうした状況に共感しながらもアレルギー患者への配慮を理解していただく地道な取り組みとなり、2回、3回と訪問を続けるうちに、担当者の方々もその必要性を理解し、東日本大震災時と全く同じ経過をたどる活動を続けている。8月1日～3日の訪問では、直接の被災者支援部門に加え、教育委員会や保育所の担当など、支援の対象を広げた協力も行い、その中でも「災害時用ビブス」を紹介した。そうした中から予想していなかった進展があり、被災自治体の学校給食センターの再開・運営、食物アレルギー対応について助言を求められ、学校給食のアレルギー対応に詳しい管理栄養士を紹介するなど協力の幅が広がっている。

課題および展望

東日本大震災の後、当会代表も委員に加わった内閣府の検討会が「避難所における良好な生活環境の確保に向けた取組指針」をまとめ、全国の自治体に通知している（平成25年8月）。その中でアレルギー疾患患者への配慮についても詳しく盛り込まれており、熊本地震で「指針」がどの程度生かされているかが問われたが、熊本の被災地域では残念ながら「指針」を知っている被災者支援の担当者はいなかった。一つの要因として自治体の防災担当と被災者支援担当が別々に活動していることがあると思われ、改善について内閣府の防災担当者にも報告した。当会は「災害時用ビブス」の活用などを通じて築いた連携を生かして、保健師、看護師、栄養士などにアレルギーについて正しく理解し対応できる力を得ていただくために、専門医などが担当する研修機会を提供するなどの幅広い活動を続けていきたいと考え、既に2自治体から研修実施の要請がある。



益城町保健福祉センター（災害対策本部、避難所）にビブスを届ける



熊本市総合保健福祉センターで栄養士、保健師と意見を交換



熊本地域医療センターの専門医に「災害時用ビブス」を託し、活用を要請

積み木&絵本・笑顔プロジェクト2016

◎ 事業の目的

対象：保育園児・幼稚園児

課題：本震の恐怖から続く余震によるストレスへのこころのケア
(リラクゼーション・ワークショップ開催)

◎ 事業内容と活動経過

1. 「積み木&絵本」プレゼント・ワークショップ

- ①川の字に寝そべった子どもたちに、たくさんの積み木を浴びさせるようにかけていくと、ヒノキの香りに包まれ、緊張がほぐれていく。
- ②積み木を自由に組み立てることで、小さな「命」を育てる愛しさ、うれしさ、大事にしてあげようとする気持ちが高まりストレスから解放される。
- ③子どもにとっては建築でもあり「命を育てている」ことと同じ。高く積み上げ、崩れないように辛抱する心や、丁寧さ、共同で積み上げることの喜びを積み木遊びの中で学ぶ。

2. 「心のケア」ワークショップ

ワークショップは、効果的に身体を使ったゲームを行うことにより、恐怖体験や悲しみ、怒りの感情を外に逃がし、喜怒哀楽を表現させるプレイセラピー。

□活動期間：2016年7月9日～7月16日

□絵本・積み木の届け先(すべて熊本市)

- 7月11日 モロナイ保育園
- 7月12日 やまなみ保育園
- 7月13日 帯山保育園
- 7月14日 寺原保育園
- 7月16日 五丁こども園

「心のケア・エクササイズ」とは

子どもの抑制された感情をグループで表現させ、そのストレスから救うエクササイズ。

米国の心理学博士たちが構築した災害のストレス体験からPTSD(心的外傷ストレス障害)にならないようにするための心のケア・エクササイズ。地震のような衝撃的な出来事にショックを受けると自律神経系の障害が生じ、通常の肉体や精神の機能が損なわ

れる。さらに、情緒が不安定になり急に乱暴になったり、全般的に不安に陥ったり、妄想、フラッシュバックまたは号泣といった行動をとる。これらは、心のバランスが崩れている兆候だが、簡単なゲームや運動によるアクティビティによって正常に戻す。

「心のケア・エクササイズ」10パターン

- 1.リズムのエクササイズ
- 2.呼吸することで身体を動かす
- 3.関節をゆるめる
- 4.笑って、叫んで、跳ねる
- 5.両極端の中で柔軟性を創造
- 6.中心にいるリーダーに向かって怒りを表現
- 7.恐ろしい音を立てて恐怖を表現
- 8.フラストレーション、いらだち、笑い、悲しみ
- 9.手をつないでグループを一つにする
- 10.最後は呼吸で心を整える

子どもは、親や信頼できる大人から確実に安心感を与えられることによってストレスを乗り越え自分が安全であることを体感する。

◎ 事業の成果

東日本とは全く違い両親・家族を亡くした子どもはいなかったため、そのストレスは軽微ではあったが、一部余震のストレスはあった。各園の園長先生はじめ保育士や先生たちが子どもたちに深く寄り添い、園児たちへの対応がそれぞれ柔軟で万全のフォローだった。

ワークショップ終了後、子どもたちは笑顔でボランティアに抱きついてくることで、リラックスしたことがわかる。

これは、児童心理学博士の考察では「我慢していた感情が解放された」結果とのこと。

◎ 課題および展望

今後は、毎年東日本3県で12月第2週に開催している「絆サンタがやってきた!」イベントを熊本でも実施する。

東日本活動では、7年目に入った今年、当時小学生・中学生だった子どもたちが大学生になり、ボランティアとして参加している。熊本の子ともたちも、同じ体験からそのつながりを築いて「絆」にしていきたい。



プレゼント：積み木



プレゼント：絵本



「心のケア」ワークショップ

熊本地震益城町就学前母子ケアプログラム

◎ 事業の目的

1. 益城町の避難者はピーク時4,500人を超え、特に子育て世帯の母親が、子どものストレスを全面的に受け止め、疲弊されている現状を被災地で確認している。小中学校は緊急時支援スクールカウンセラーが配置され、親子ともケアを受ける体制ができていないため、必要な心のケア支援が専門家集団によって必要になる。
2. 同時に支援者の保育士さんも、被災者であるのに、子育て広場や避難所・仮設団地支援を行うために、被災後のストレスが多い中、従事されている。その精神的負担を軽減することも目的である。
3. 上記の目的のために、益城町で子育て広場を運営されている「NPO法人子育て応援おきな木」と連携し、その広場や仮設団地に来ている母子の被災後のストレス反応の低減を図るべく、心理相談、遊び支援を行う。
4. 連携先としては福岡県臨床心理士会の臨床心理士3名に現地に来ていただく。また、兵庫県臨床心理士会には東日本大震災、阪神淡路大震災の支援経験から被災後ストレス事例のスーパーバイズを依頼する。

◎ 事業内容と活動経過

第1期 「被災地支援団体との協働開始期」

(#1～8 6月3日～7月1日)

目的) 現地NPOのニーズ汲み取り、被災母子の被災状況の聴き取り

内容) 物資支援、イベント支援(日曜日小学生企画)、相談支援、事例に対してのスーパーバイズ

第2期 「被災地支援団体の拠点移行に伴うサービスの多様化期」

(#9～27 7月8日～10月7日)

目的) 現地NPOの更なるニーズの汲み取り、支援者のメンタルヘルス支援、被災母子の遊び支援

内容) 物資支援、イベント支援(ツイズディ講座)、相談支援、事例に対してのスーパーバイズ

第3期 「仮設団地支援期」

(#28～48 10月14日～2017年1月27日)

目的) 仮設住民(特に子育て家庭)への相談支援、サロン活動の補助、被災母子の遊び支援

内容) イベント支援(仮設団地支援入門講座、ツイズディ講座)、事例に対してのスーパーバイズ

◎ 事業の成果

第1期の成果・効果～①必要な物資、人的支援などのニーズを現地で関係を構築しながら汲み取ることができた。②長期間腹を据えて、現地支援を行う気概を理解していただいた。③小学生の困難事例に対して臨床心理学的視点からかわりのポイントを示すことができた。

第2期の成果・効果～①発達に関する課題を持つ子どもの相談が増えて、その保護者への精神的負担の軽減が実施できた。②子育て広場スタッフが持っていなかった発達の視点を説明し学びを行っていただいた。③余震不安の親子へのガイダンスを適切に行えた。

第3期の成果・効果～①仮設団地の現地ニーズと子育て家庭ならではの生活不安の聴き取りを行うことができた。②支援スタッフの支援疲労からくる抑うつ傾向を察知し、相談支援をすることができた。③これから先に起こりうる仮設団地の精神的疲労を予見した上で新たな支援手法を、工夫・開発できるように他機関と連携することができた(宮城県など)。

◎ 課題および展望

1) 仮設団地入居者から「発災後一年はみんなでなんとか手を取り合ってやろうとしたけれど、そこからなかなか無理がきかなくなっている気がする」とのコメントをいただいた。支援の手が減るなかで、現地ニーズを汲み取りながら、親子支援を継続させていきたい。

2) 発災時、1～2歳だった子が成長していく過程で、潜在的PTSD発症の可能性を継続して観察する。



子育て広場での小学生支援



福岡県臨床心理士会の支援：夏祭りの準備を手伝う



就学前母子支援：親子遊びを一緒にしながら、被災後の相談に乗るタイミングを提供

親子遊びの広場

◎ 事業の目的

支援対象者：親子

目的：親子で遊べる場所を提供し、おもちゃで親子一緒に遊ぶことにより、震災によって変化した日常生活からのストレスが和らぐような時間を提供する。また生活上での悩みなどを専門家に相談できるコーナーも作り、それらの不安を少しでも和らげる手助けをする。

◎ 事業内容と活動経過

熊本県内での親子で遊べる広場を開催。

- ・2016年7月9・10日イオンモール宇城店の店舗内スペース
- ・2016年8月11日益城町 peace winds Japan ユニットハウス村（避難所）

□イオンモール宇城店での「おやこあそびのひろば」

来場者数：7月9日 約240人 7月10日 約350人

内容：以下3つの構成で行った。

1.おもちゃで遊べるスペース

東京おもちゃ美術館から借りてきたおもちゃで遊べるスペース。大量の積み木と、木のおもちゃで遊べるようにした。おもちゃコンサルタント、医師、看護師には遊びながら参加者に積極的に声かけをしてもらった。その中で、子どもの病気、発育などの相談を受けた。大量の積み木では、最初親子で積み木を積んでいたが、そのうち親御さんの方が夢中になり大作を作ったりする光景が見られた。

2.クラフトコーナー

6種類程度のクラフトを用意。希望のクラフトを聞いて、そのコーナーに案内して作成をした。作成したおもちゃでその場で遊ぶ光景を見ることができた。小さなお子さんでもできる物が多く、大盛況だった。

3.ボーイスカウトの紹介コーナー

今回協力してくれた、ボーイスカウト熊本県連盟の紹介コーナーを設置。実際にクラフト作成などでスカウトと接した親御さんたちが興味を持ってくれ、ビデオを見たり、パンフレットを手に取り関心を示していた。また数名の入団希望があった。



ユニットハウス村「おもちゃのひろば」での絵本の読み聞かせ

□ユニットハウス村「おもちゃのひろば」

参加者：15人（子ども7人、大人8人）

内容：通常学習室として使用しているコンテナハウスを使用し、東京おもちゃ美術館から借りてきたおもちゃを出し、簡単なクラフトもできるようにして遊んだ。途中地元で活動している絵本の読み聞かせグループによる読み聞かせの時間も設定した。子どもと一緒に遊ぶことはもちろん、一緒に来ている親御さんにもこちらから積極的に声かけをすることにより、日常生活での困りごとなどを聞くことができた。

◎ 事業の成果

□横をつなぐ

今回このような活動を行い、それぞれの会で新たな出会い、橋渡しができたことは大きいと感じた。

2回目の活動の「おもちゃのひろば」のきっかけは、peace winds Japanの運営しているユニットハウス村（益城町）に立ち寄った際に、子どもたちに何かイベントがないかとの相談を受けたことだった。一緒に活動したおもちゃコンサルタントの方が、益城町在住で活動できる場所がないとお話だったので、この両者をつなぎ、2回目の「おもちゃのひろば」を開催した。またこの会で一緒に活動を行った地元の絵本の読み聞かせを行う団体も、この場所で定期的に遊びの会を開催することとなった。

□持っているスキル、ノウハウの提供

もともと当団体は東日本大震災より子どもの心のケア活動を行っており、子どもの遊び場などの開催経験や、様々な横のつながりを持っていたので、これらを今回の活動に活かすことができた。

◎ 課題および展望

今後は、地元九州の方々がより動きやすく活動を行っていただけるようなサポートができるようにしていきたい。そのためには、私たちの持っているスキルや、ネットワークを提供することが重要だと思う。何から何までやるのではなく、「餅は餅屋」でそれぞれのスキルを活かして、それらをつなぐことが私たちができると考えている。



「おもちゃのひろば」チラシ

笑顔の花を育もう

◎ 事業の目的

対象

熊本地震により被災した益城地域に住む子どもたち

解決したい課題

- (1) 子どもたちの不安を取り除き、安心して暮らせるようにしたい。
- (2) たくさんの子どもたちに笑顔の花を咲かせたい。

◎ 事業内容と活動経過

- ・5月25日より2月まで、益城町広安西小学校や益城町小池島田仮設にて活動を実施。
- ・計画当初は、読み聞かせ、体操、手芸など作業を細かく分けて活動していたが、これらは子どもたちにとっては受動的になってしまうことを反省し、子どもが自ら考え・作る、総合芸術である劇団「ましきっずプレイヤーず」を2月末に結成するに至った。
- ・熊本県内の劇団から構成作家・俳優を講師に迎え、ダンスやアウンサーの講師らとともに定期的に月2回の練習を重ねている。

◎ 事業の成果

- ・当初の計画とはかけ離れたように思われるが、劇団・演劇は総合芸術であり、子どもたちに体験させたかったことが全て網羅されている。
- ・何をするのか、期待いっぱいの子どもたちは、毎回大きな声で話し、笑っている。
- ・2017年度より益城町文化会館、熊本県立劇場の支援をいただけるようになった。
- ・毎回、数名の保護者の方の見学もあり、子どもの様子を見て楽しんでいらっしゃる。
- ・6月『セサミストリート』との共同作業（益城町にてワークショップを実施）が決定。

◎ 課題および展望

- ・新聞、テレビで取り上げられることが多いので、子どもたちが落ち着いて行動できるよう指導を心がける。
- ・目標を持つために、年に一回の発表会を実施する。
- ・絵を描きたい、ピアノが好き、各々の子どもたちが好きなことを活かせるような演劇を子どもたちと作り、益城町に住む多くの人々に見てもらいたい。



益城町PTA総会において読み聞かせ
(講師・政木ゆか)



「ましきっずプレイヤーず」メンバー募集チラシ



「ましきっずプレイヤーず」結団式

クリニクラウン熊本支援事業

◎ 事業の目的

2011年度から実施しているクリニクラウン東北事業での経験を活かし、熊本県内の小児病棟へクリニクラウンが訪問し、入院中の子どもたちの不安の軽減とストレスの解消、心のケアを目指し、入院中の子どもたちの療養環境の保持、QOLの向上に貢献していく。また、子どもたちを支えている家族や医療者の緊張感をやわらげ、バーンアウト（燃え尽き症候群）を防ぐことで、入院中の子どもの療養環境の保持に協力する。

◎ 事業内容と活動経過

熊本大学医学部附属病院（熊本市）の小児病棟（計6回）、熊本赤十字病院（熊本市）の小児病棟（1回）をクリニクラウンが計7回訪問し、延べ176人の子どもたちに「こども時間」を届けた。

病院名	日程	子ども数
熊本大学医学部附属病院 (熊本県熊本市)	第1回目	2016年7月13日(水) 24名
	第2回目	9月7日(水) 22名
	第3回目	11月16日(水) 21名
	第4回目	2017年1月18日(水) 21名
	第5回目	2月22日(水) 23名
	第6回目	3月15日(水) 23名
熊本赤十字病院 (熊本県熊本市)	第1回目	2016年7月14日(木) 42名
合計		176名

※2016年7月14日(木)の午前中に社会福祉法人純心会 空港保育園を訪問。2017年3月16日(木)に西原村立にしはら保育園を訪問した。避難所から保育園に通う子どもたちも多くおり、余震などにより不安な日々を過ごしている子どもたちに、楽しいひとときを届けることができた。

◎ 事業の成果

訪問先病棟のスタッフからは、「子どもたちが自然といきいきとした表情になり病棟全体に笑顔が広がった」「おさんの入院で不安な生活を強いられている家族にとってもリラックスした時間を過ごすことができた」「子どもたちや家族一人ひとりとの時間を大切にされ

ているクリニクラウンの姿をみて、スタッフとしても子どもたちや家族との接し方を学ぶことができた」という感想を寄せられた。継続的に訪問することで病院スタッフとの連携が深まってきている。そして、長期入院をしている子どもたちや家族にとってクリニクラウンの訪問が期待感や安心感につながり、入院中の子どもたちの療養環境やQOLの向上に役立つことができている。

◎ 課題および展望

医療スタッフとの連携が深まる中、震災後の心のケアという部分だけでなく子どもの成長や発達を支えるという視点で、医療スタッフと子どもの様子を話し合う機会が増えてきた。しかし、2016年4月の熊本地震から1年が経過し、ライフスタイルや生活の基盤が変わり、子どもたちだけでなく大人にとっても大きなストレスとなっている。また、震源地となった益城町や西原村ではまだまだ生活に不便を強いられている方々がおられ、復興には時間がかかると感じている。

訪問先病院には、長期入院をしている子どもたちも多くおり、将来に対する不安を抱えながら病気と向き合い頑張っている。クリニクラウンが訪問することで、子どもがその子らしく過ごせる「こども時間」を届け、遊びやコミュニケーションを通して子どもたちの成長を支え、子どものQOL向上の一助となるよう継続的に訪問を実施したいと考えている。今後も継続的な支援が必要であると考え、2017年度は、年6回の訪問を計画。以降も実施計画をたて継続的な支援が行えるよう体制を整えていきたい。そのための財政や人員の確保が今後の課題であり、今後も多くの方に支援を呼び掛けていきたい。



病院訪問の様子：「誰がきたのかな？」廊下からクリニクラウンの様子をうかがう子ども



病院訪問の様子：子どもがしていた面白い動きが、なぜかダンスになっていって…一緒にダンス！



病院訪問の様子：クリニクラウンの仲間誕生。みんなでノーズオン！

熊本地震被災母子支援活動（助産師による避難所巡回）

◎ 事業の目的

妊産婦や子どもをもつ母親の不安感やストレスは平常時であっても現れやすいものだが、災害時の特殊な生活環境はそれに拍車をかける。母親の心の変化や子どものこれまでと異なる反応や行動には特に気を配らなくてはならないが、災害時の母子支援については行政の手が届きにくく、避難所の運営責任者や周囲の理解が得にくいこともあり、避難所で肩身の狭い思いをすることで過度なストレス状態になってしまうケースも散見される。

母子に寄り添う専門家である助産師が各地の避難所を訪問することで、妊産婦や乳幼児のケア、育児相談などを実施するとともに、授乳やスキンシップができる空間を避難所に設けるよう活動する必要があった。

◎ 事業内容と活動経過

日ごろより熊本市、益城町、西原村などで訪問指導に従事している25名の助産師が、平時の活動地域内にある避難所や大型施設の駐車場などを巡回し、妊産婦や乳幼児のケアや育児相談を実施するとともに、衛生用品や育児用品の支援物資を届けた。

ケアや相談の一例をあげると、ライフラインの喪失により乳幼児の保清ができなくなったことで臀部や陰部の発赤、おむつかぶれ、女児の排尿痛などのトラブルがみられ、洗面器一杯のお湯で行うことができる清拭とおしり洗いのスキンケアの方法を伝えた。また、人工乳を用いている母親からは哺乳瓶や乳首の消毒ができないことについて相談があり、薬剤による浸けおき消毒セットと個人を識別するネットを用意し、使用方法を明記のうえ、管理を避難所管理者に依頼した。

さらには、各避難所に「母子と女性に配慮した避難所の運営」を要請するチラシを配布し、妊産婦や女性専用のスペースが確保されるよう努めた。

◎ 事業の成果

日ごろより地域で訪問指導に従事している助産師は、活動地域の地区診断を行っていることから、被災状況、ライフラインの復旧状況、母子の多い地区、一次避難所、二次避難所のほか、避難所になりそうな施設や駐車場などの情報を把握していた。また、行政や地域とのつながりも持っていたことから、被災して支援が必要となっている母子に対して、自治体の保健師や地域の民生児童委員と連携した支援をすることができた。

さらには、各避難所に母子と女性に配慮した避難所の運営について要請して回り、妊産婦や女性専用のスペースを確保するなど自律的な被災母子支援活動をすることができた。熊本市立砂取小学校避難所に常設した「ママと赤ちゃんのスペース」には、助産師のケアや育児相談を受けられるという情報をSNSなどで知った母親たちが集まってきてくれた。

◎ 課題および展望

今回の熊本地震の母子支援活動のように、日ごろより地域で訪問指導に従事する助産師が、その延長として災害時に同じ地域の母子支援活動を行うという仕組みが構築できれば、コミュニティーケアの実践者として、助産師は災害時に即戦力となり得る。

そうした仕組みの構築に向けた課題としては、地域で訪問指導に従事する助産師の育成、活動の拡大、母子支援事業の受託、国や行政への働きかけなどがあげられる。

地域に根ざした助産師だからこそできた自律的な被災母子支援活動について、広く知ってもらうことが必要だ。東日本大震災や今回の熊本地震を教訓として、母子と女性に配慮した避難所の運営や災害時母子福祉避難所の設置推進、災害時における助産師・助産所活用の仕組み構築について、国や行政に働きかけてまいる所存だ。



避難所で、3つの電気ポットでお湯を沸かして沐浴準備
(熊本市立砂取小学校)



ポットのお湯をたらいに移して沐浴



避難所での、赤ちゃんの力をほぐす指導

熊本地震被災母子支援活動（母子向け専用避難所の運営）

◎ 事業の目的

一般社団法人熊本県助産師会が運営する「くまもと子育て女性の健康支援センター」には、発災直後から「母子で避難できる場所はありませんか」という問い合わせがあった。被災母子受け入れの申し出があった日本助産師会九州各県会員の助産所について情報提供を行ったものの、遠隔地への避難となることなどから、利用につながるケースはわずかだった。

熊本県産婦人科医会、熊本県産婦人科学会、熊本県助産師会で災害支援活動についての情報共有を進めるなか、乳児を連れた被災母子、なかでも分娩施設退院後の行き場が避難所しかない母子への支援が急務となり、母子向け専用避難所の開設・運営に向けて動き出した。

◎ 事業内容と活動経過

熊本市に対して、乳児を連れた被災母子を受け入れる避難所の必要性について熊本県助産師会より申し入れを行うとともに、熊本友の会（熊本友の家）の協力をあおぎ、4月22日、熊本県助産師会の運営による母子向け避難施設「友の家産後ケアハウス」の開設が決定した。

産婦人科医会会員に情報提供を依頼するとともに、厚生労働省からも熊本県、熊本市、産科医療機関に対して情報提供をしていたが、母子向け避難施設の周知を行った。

「友の家産後ケアハウス」の運営は熊本県助産師会が行ったが、医療的バックアップは熊本大学医学部附属病院が担当され、母子の食事のお世話や日常生活支援などには熊本友の会の会員の方が日本助産師会会員とともにあたってくださった。

◎ 事業の成果

最後の母子が退所する5月23日までに3組の避難母子を受け入れた。また、助産師のケアや育児相談を受けられるという情報をSNSなどで知った母親たちが集う拠点とすることができ、沐浴や母乳相談に応じることもできた。（デイケアサービスについては公益財団法人ジョイセフ様の支援により実施した。）

入所者は3組にとどまったが、母親やその家族、分娩施設、行政からの入所問い合わせは20件を超えた。いただいた問い合わせのなかには、「いますぐには入所しないけれど、いざとなったら行くところがあると思うと安心です」との声もあり、母子向け避難施設の開設の成果・効果は大きなものであったと考える。

◎ 課題および展望

母子向け避難施設の入所対象者としては、当初、退院直後の母子のみとしていたが、利用希望者のニーズなどを踏まえ、0歳児まで、上の子どもも一緒に入所可能と変更した。母子向け避難施設についてはその対象を母子に限定するケースは少なくないが、問い合わせがあったうち入所に至らなかった理由として、「上の子どもの世話も自身が行っている」という声が聞かれた。また、「家族（夫）と離れたくない」、「家族（夫）が離れたがらない」という声も聞かれ、ニーズのミスマッチがあることがわかった。

また、今回は熊本友の会（熊本友の家）の施設を母子向け避難施設として利用させていただくことができたが、災害時に備えて、すべての地域で拠点を確保できるよう努めなくてはならない。東日本大震災や今回の熊本地震を教訓として、母子と女性に配慮した避難所の運営や災害時母子福祉避難所の設置推進、災害時における助産師・助産所活用の仕組み構築について、国や行政に働きかけてまいる所存だ。



熊本友の家：調理場



熊本友の家：食事（離乳食）



熊本友の家：入所中の双子の乳児が沐浴中

くまモンプロジェクト

～小児病棟で病気や治療と向き合う子どもを応援しよう～

◎ 事業の目的

熊本では、2016年4月14日以降の震度1以上の地震の回数は1,400回を超え、熊本県内では4万棟余りの住宅で被害が確認されているうえ、およそ1万人が避難生活を余儀なくされているため、被災者は物質的被害だけでなく精神的にも大きなダメージを受けている。このような状況の中、入院している多くの子どもたちが親元を離れ余震に怯えながら病気や治療と向き合い生活をしている。2度の大きな地震から、余震が来ると手を握りしめて離さない子どもたちもいるという。そこで、入院中の子どもが少しでも安心して過ごせるように熊本に馴染みの深い「くまモン」のぬいぐるみを子どもたちにプレゼントしたいという医療従事者の願いを受け、「子どもたちへの心の支援」として、本プロジェクトを実施した。

◎ 事業内容と活動経過

子どもたちが安心感を少しでも持って生活していけるように、くまモンのぬいぐるみの贈呈イベント、ぬいぐるみを活用したリラックス方法の提示をすることにより子どもたちや被災した方々の安心につながる環境を提供した。

■熊本機能病院

日時：平成28年8月4日（木）15:30開催

内容：子どもが抱きしめて抱えて寝られるサイズの「くまモン」のぬいぐるみを入院中の子どもにプレゼントする。（20人）

注釈：ぬいぐるみメーカーさんに確認したところ、布用除菌剤で拭いて乾かし袋に入れるという方法が良いのではとアドバイスをいただき、布用除菌剤を購入。

■こうのとりのゆりかごを開設された熊本慈恵病院、由来助産院

日時：平成28年10月10日（祝日）10時～12時

内容：地震や余震、それによって起こる周りの変化に過度に戸惑いを感じず安心できる環境を提供したい。

くまもと音楽復興支援100人委員会による音楽の演奏、シャボン玉アート（FTCJくまもと支部）、くまモンのぬいぐるみ贈呈式（46人）

参加者：子ども 46人 大人 約40人

■わんぱく保育園

場所：熊本県上益城郡益城町寺中1363-1

日時：11月28日（月）10時～11時半

協賛：くまもと音楽復興支援100人委員会（えほん楽団）

子どもの年齢：1歳～6歳 支援人数：65人

■個別郵送にて贈呈

熊本県内病院（25人）

◎ 事業の成果

震災直後より病気や怪我が原因で熊本県内で入院を余儀なくされている子どもたち、親元を離れて過ごさなければならない子どもたちを対象にベネッセこども基金にもご支援をいただきながら、くまモンのぬいぐるみを活用した震災支援活動を行うことができた。

実数としては、156体のくまモンのぬいぐるみを贈呈し、贈呈するだけでなく、イベントを併催することができた。

効果として、単に贈呈式で終わらせることなく、そのイベントには地域の人や保護者を巻き込むことで、新しいコミュニティー形成の一端を担うことができたと感じている。

実際に、3回目として開催した、「わんぱく保育園」では、音楽イベントを併催し、地域の高齢者も参加したりと、縦のつながりを持てる場となった。各開催イベント共に、その場で終わることなく、活動の輪が広がるように、幅広い年齢層やボランティアを巻き込み、高校生ボランティアがしゃぼん玉アートをしたり、別組織の音楽の演奏をすることで、それぞれのボランティア活動のつながりと活動の場を創造することができ、助成後の活動に活かしていきたい経験が得られた。

◎ 課題および展望

贈呈式で音楽イベントなどの併催実施を開始し、イベントとの併催に効果を感じた。

今後は、「くまモン」ぬいぐるみの配布と一部への公開の音楽イベントを実施するだけでなく、地域へも公開し、コミュニティー強化への一端を担う場にしたいと考えている。

それにより、被災者の方々が世代を超えて音楽に触れて楽しんで同じ場で共感をすることにより、仲間意識や一人ひとりの住民が地域に対する関心を深めることができ、地域内でのつながり形成支援の一端も担うことができると考えている。



児童発達支援事業所で86人の方へのイベント実施とくまモン贈呈



機能病院にて、入院している子どもたちに贈呈



贈呈したくまモンのぬいぐるみ

第2回決定分（6月16日発表） 助成事業一覧

ページ	団体名	所在地	申請事業名	活動地域
13	特定非営利活動法人 アトピッ子地球の子ネットワーク	東京都	熊本地震アレルギー患者・災害弱者支援活動	熊本県内など
14	特定非営利活動法人 いじめ対策プロジェクト	鹿児島県	避難所や仮設住宅で過ごす子どもや親の心のケアを行う事業	熊本市など
15	特定非営利活動法人 instrument for children	東京都	healing mind project 被災地の子どもたちの心を、音楽やアートを通じて表現したり聞いたりすることで心のストレスを吐き出させ、癒し、明日への希望につなげるプログラム	山都町
16	くまもと音楽復興支援100人委員会	熊本県	ケアコンサート（音楽の炊き出し支援）の実施	熊本県内
17	一般社団法人 子どものエンパワメントいわて	岩手県	「学びの部屋くまもと」応援プロジェクト	益城町
18	特定非営利活動法人 さくらネット	兵庫県	益城町の学校を応援！ 安心と安全を取り戻す機会づくり～子ども、保護者、教職員を対象とした心のケア・防災教育プログラムの実施～	益城町
19	公益財団法人 ジョイセフ	東京都	母と子の不安とストレスを癒す交流の場の提供	熊本県内
20	公益財団法人 ジョイセフ	東京都	産後うつ病の疑いのお母さんと新生児の訪問カウンセリングケア	熊本県内
21	特定非営利活動法人 人材育成支援センター	熊本県	熊本地震救援活動・天草ショートステイ被災地ママ受入事業	熊本県内
22	公益社団法人 チャンス・フォー・チルドレン	東京都	熊本地震で被災した中学生・高校生に対する学校外教育クーポン提供事業	熊本市、益城町、西原町、南阿蘇村など
23	公益財団法人 日本YMCA同盟	東京都	熊本の震災に伴う、熊本YMCA指定管理受託先である、益城町総合運動公園内避難所、および周辺における被災者支援の一環としての、「子ども向け、プレイパーク、およびプレイルームの運営」	益城町
24	一般社団法人 MMIX Lab	宮城県	GAMADASE ART PROJECT_がんばれ熊本！学習支援	八代市、宇城市、氷川町など
25	よかたま市民ネットワーク	熊本県	ココロとカラダのケア・サポート事業	熊本市など

熊本地震アレルギー患者・災害弱者支援活動

事業の目的

食物アレルギー、喘息、アトピー性皮膚炎などのアレルギー疾患があり、被災者となった人の支援を行う。また、乳幼児、妊産婦、シングルマザーなどの災害弱者も支援の対象と考える。食物アレルギーがあり、一般の支援物資を食べることができない人の食糧搬送、ぜんそくがあり、ネブライザー（吸入器具）が必要な人へのネブライザーの提供、アトピー性皮膚炎がある人の皮膚ケアに必要なぬれティッシュの提供などを行う。

事業内容と活動経過

- ・2016年4月16日から25日間にわたり、車（ハイエース1t）を持ち込む形で、宅配便などが通常稼働していない熊本現地での物資搬送。宅配便一部再開後も、未再開地域への搬送などを実施。
- ・宅配便を活用し、被災地域の保育園、役場の栄養士、地元を巡回している生協などと連携しながら、患者や災害弱者の状況を掘り起こし、物資の提供や相談活動による支援を行った。
- ・熊本の震災発生直後に、支援活動を行うため、物資搬入・仕分け・搬出のために当当事務所近くに部屋を借りた。支援している期間だけなんとかこの場所を確保しなければ、支援活動が立ちいかなかった。
- ・ぜんそく患者のためのネブライザーを希望者に提供した。自宅内でネブライザーが壊れたり、がれきの中から取り出せない人などからの要請があった。
- ・救援依頼を受けていることを知らせるポスターを作成し配布した。
- ・支援物資は被災者に全て無償で提供した。

事業の成果

- 物資提供と相談活動
- ・物資1回搬送 72人
 - ・継続支援を求める人含む延べ人数 約160人
 - ・ネブライザー無償提供 7人
 - ・病院1カ所2回
 - ・保育園6カ所各2回以上
 - ・村役場1カ所2回
 - ・避難所よりも車中泊の人がとても多いので移動先へも届けた。
 - ・電話相談による情報提供活動を行った。

課題および展望

昨年2016年7月に当法人の代表理事と理事が聞き取りのため、熊本現地の数カ所の保育園を訪問した。中には「自分たちはもう日常活動ができてから、まだ復興できていない別の園を支援してほしい」と新たな保育園を具体的に示したところもあった。当法人が何らかの対応をした72人と、6カ所の保育園にその後の様子を聞くアンケートを2017年7月に実施する。さらに私たちの活動資料を送り、情報支援などができることを伝えたいと考えている。



最初に送った支援物資：山口県の宅配便基幹配送センター留で送付（2016年4月19日着）、そこでボランティアドライバーが荷受けして、熊本の個人宅や保育園まで搬送



そのままでも食べられる食品類を送付：箱に「食物アレルギー患者用」と記載し、アレルギーや連絡先を記載してある



物資中継点（倉庫）での仕分け作業

避難所や仮設住宅で過ごす子どもや親の心のケアを行う事業

◎ 事業の目的

2016年4月14日、16日に熊本を中心に発生した地震により、避難所や仮設住宅などで暮らす子どもやその保護者などが心理的に追い詰められたり、きつい状況で生活を余儀なくされている。そういった方々の心理的不安や困りごとなどをお聞きし、少しでも安心して生活の再建がしやすいように、心理的負担を取り除くことが急務である。

◎ 事業内容と活動経過

熊本県上益城郡益城町総合体育館避難所にて開設されている学習ルームに、当団体の心理カウンセラー、看護師、学習支援員を週1回派遣し、主に、小中学生の学習支援を行った。その中で、日常生活上の困りごとや、再開した学校での困りごと、また、うれしかったことなどの聞き取りを行った。

◎ 事業の成果

はじめは子どもたちがなかなか学習ルームに寄り付かず、遠巻きにしている感があったが、学校が再開し、宿題などが増えてくるに伴い、学習ルームの利用者も増え、交流ができるようになった。ロビーなどで遊んでいる子どもから、学校や生活上での困りごとを聞き、避難所の管理運営側に伝えることができた。

◎ 課題および展望

週1回、3時間程度の訪問では、こちらから積極的に声かけをしたり、保護者様への聞き取りまでは行うことができなかった。2016年10月に仮設住宅の整備が終わり、避難所が閉鎖されてからは、プライバシーの問題もあり、個々の家庭への直接的な支援を行うことが難しくなった。今後は、鹿児島県などに避難している方への心理的サポートを通じて、支援を行っていききたい。



益城町総合体育館避難所の学習ルームにて待機する
心理カウンセラー、学習支援員



同左

ヒーリングマインドプロジェクト

被災地の子どもたちの心を、音楽やアートを通じて表現したり聞いたりすることで心のストレスを吐き出させ、癒し、明日への希望につなげるプログラム

事業の目的

支援対象：熊本県山都町の18歳未満の子どもとその養育者。彼らを支援する保育者や教育関係者。

現状：熊本県山都町は、震源地近くにあり多大な被害があるものの、益城町などのTVなどでよく報道される地域にボランティアが集中し、山都町は県内外からの支援が極めて少ないという支援格差がある地域である。この地域は農村地帯であり、5月中旬から下旬は災害後のかたづけ、6月には田植えが始まり、町人は生活再建に多忙を極め、被災した子どものケアが後手に回っている可能性がある。私たちが町役場や教育委員会に問い合わせたところ、被災した子どもの異変に関する相談が相次いで寄せられており、精神的に不安定になっている子どもが増加していることがわかる。子どものメンタルヘルスと養育者らのメンタルヘルスは密着に関連しており、被災した子どもとその家族、彼らを支援する支援者らのメンタルヘルスは合わせてケアしていく必要がある。また、危機的な状況下にある子どものケアをおろそかにすると、その後PTSDなどの発症や家族機能の変調をきたすことが先行研究より示唆されており、早急な子どもとその家族、支援者らへのケアは早急に必要なことと考える。

事業内容と活動経過

第一回目2016年7月27日 アートコンサート

午前 熊本県山都町 中島小学校体育館 小学生70人・近隣住民30人
トランペット奏者、フルート奏者、コントラバス奏者、ピアノ奏者で、子どもたちがよく知っているクラシックや童謡、アニメソングを演奏しながら、鉛筆抽象画家によるライブペインティングを同時に行った。芸術に触れる機会が少ないということもあり、子どもたちは興味津々に見入っていた。子どもたちにも生の演奏を聴きながら、絵を描くワークショップを行った。課題は『果実がついた木』。バームテストも兼ねて行い、同行した救急看護の専門家が注意深く見守り、経過観察も行った。最後に、鉛筆抽象画家が描いた絵を子どもたちにプレゼントしたら、とても喜んでくれて、鉛筆で描いた作品に興味を覚えていた。

午後 熊本県山都町 中尾児童館 中島保育園など3園の保育園児100人 近隣住民20人

対象者が幼児ということもあり、楽曲を少し分かりやすいプログラムにして、演奏しながら一緒に歩いたりして、リトミック的な要素を入れて実施。鉛筆抽象画家によるライブペインティングを同時に

行った。描いた作品を塗り絵にできるようにして保育園に贈呈したところ、オリジナルの塗り絵に活用できることから、先生方に大変喜ばれた。午前と同様、生の演奏を聴きながら絵を描くワークショップを行った。

午前午後共に、子どもたちが描いた絵を東京に持ち帰り、東京で行う『音育ランド』というコンサートの来場者の子どもたちから、メッセージを添えて返却した。

第二回目2016年 12月12日 ポサノバコンサート

午前 熊本県山都町 中島小学校集会室 小学生70人

子どもたちがよく知っているクラシックや童謡、アニメソングをボサノバアレンジで演奏しながら、リラックスできる空間を提供した。
…以下略

午後 熊本県山都町 中尾児童館 中島保育園など3園の保育園児100人 近隣住民20人

対象者が幼児ということもあり、リトミック的な要素を入れ、木の打楽器『モココ』を演奏しながら叩くワークショップを行った。

…以下略

事業の成果

芸術に触れる機会がないことから大変喜ばれ、満足度が高かったという感想をいただいている。また、子どもたちがコンサートが終わってから、自ら演奏者のところによってきて、楽器に関する質問や感想などを述べてくれて、笑顔が沢山見られたので、本当に実施してよかったと思えた。

プロの演奏を聴く機会が少なくとおっしゃっていたので、最後にプロと一緒に演奏したことによって、子どもたちの自己肯定力を高め、就学への興味に誘えたのではないかと自負している。

課題および展望

熊本県山都町の教育委員会を通じて調整をお願いしていたところ、教育委員会の担当者の方も、震災後でお忙しい為、連絡のやりとり時間に時間がかかることとなった。

また、授業のカリキュラムに遅れが出ていた為、当初の予定とは異なり事業の実施が難しく、2回しか実施できなかった。

今後も、芸術に触れる機会を持ってもらいたいと思っているので、熊本県山都町の教育委員会に現地の状況をお尋ねしながら、訪問したいと思っている。



アートコンサート：2016年7月27日 熊本県山都町中島小学校・中尾児童館



ボサノバコンサート：2016年12月12日 熊本県山都町中島小学校

ケアコンサート（音楽の炊き出し支援）の実施

◎ 事業の目的

被災した子どもたちへのケアコンサート（以下、炊き出しコンサート）を実施し、子どもたち本来の笑顔を取り戻す。

◎ 事業内容と活動経過

地震発生後、県内外から、多くのアーティストの方々が音楽による支援を申し出てくださる状況を受け、避難所をはじめ、幼稚園、保育所、小学校など、不安な日々を過ごす方々や子どもたちに、音楽を届けたいと活動をスタートした。
ベネッセこども基金からの助成を受け、アーティスト招聘のための経費を当委員会で担うことで、炊き出しコンサートが開催できた。
熊本地震発生後から3月までに行った炊き出しコンサートは200回を超えた。

【実施の一例：演奏会&折り紙ヒコーキ教室（熊本大学教育学部附属小学校）】

演奏会の中で、吉田誠さんのクラリネットと附属小学校の器楽部が共演するという企画のため、前日、吉田さんが器楽部の指導を行ってくださった。顧問の先生の、披露できるレベルに達するかとの心配をよそに、吉田さんの指導、また吉田さんの素晴らしい演奏に刺激され、子どもたちの演奏は、みるみる上達していった。とても有意義な練習会ができ、本番も素晴らしい演奏となった。

当日、世界で活躍中のクラリネット奏者、吉田さんの演奏を身近で聴くことができた子どもたちは、「初めて見る楽器であんな美しい音が出るなんてびっくりした」（1年生の男の子）等、日頃、見ることができない、また聴くことのできない楽器だけに刺激を受けたようだった。

引き続き行われた、折り紙ヒコーキ教室においても、子どもたちはパイロットや客室乗務員の制服を見るだけで興奮して目を輝かせていた。説明してくださったパイロットの方のお話も楽しくて話に引き込まれ、最後の飛ばす競争では、クラスごとの応援も盛り上がり、とても楽しいイベントだったと児童からも先生からも喜びの声を聞くことができた。子どもたちの夢が天空へと広がったようだった。
演奏者の吉田氏やJALの方々、私たちサポーターも、子どもたちが興味を持ち生き生きと楽しそうに参加してくれたことで自分たちも元気をもらえた一日だった。

◎ 事業の成果

地震後、いつもと違う行動をとったり、感情が高ぶったりと不安な子どもたちが素晴らしい音楽、楽しい音楽に触れたとき、その生き生きとした表情から、「音楽の力」の必要性を強く感じた。
その子どもたちの笑顔は、未来への希望となり、復興に向け、私たち大人が前に踏み出す大きな力となった。

◎ 課題および展望

避難所から仮設住宅へと、生活形態や生活環境が変化していき、求められるものを手探りしながらの活動だったが、今後さらにネットワークを広げ、長く続く復興へ向け、音楽による支援活動を継続していきたい。

さらに、文化芸術の普及が子どもたちの感性を豊かにし、健全な育成と、明るい熊本の発展につながることを願い、活動を続けていきたい。



さくらんぼ保育園：音楽の炊き出しコンサート



家庭的保育施設 はぐみこころ：炊き出し支援



熊本大学教育学部附属小学校：演奏会

「学びの部屋くまもと」 応援プロジェクト

◎ 事業の目的

熊本地震で被災した子どもへの支援として、放課後学習支援や避難所内の居場所づくりを行うことにより、被災者が前向きに生活や未来の夢を描き直せるよう寄り添うことを目的とする。

◎ 事業内容と活動経過

益城町総合体育館は、アリーナの被災などにより、1,000人を超える被災者を体育館内に収容できず、隣接する情報交流館を活用してなお、多数の被災者がテント生活や車両生活を余儀なくされた。子どもの放課後学習環境と被災者のデイケアを行うため、当団体は、プレハブ「よかましきハウス」を建設することとなり、ベネッセ子ども基金からの助成金に応募させていただいた。

避難所運営との連携を模索した結果、「よかましきハウス」は、6月から9月半ばの3カ月半において様々な活動を行った。益城町被災住民のみなさんが主体的に行う活動のための拠点とし、以下の3つの活動を行った。

1. 被災した乳幼児・児童の居場所づくり
2. 被災者のデイケア、健康づくりの機会の提供
3. 子育て支援活動を行う地元NPOなどとの連携による子ども支援プログラムの提供

当初は、「よかましきハウス」で放課後学習支援を中心としたプログラムを行うこととしたが、避難所内に7月半ばから自学自習スペースを設置できることとなったことから、乳幼児を含めた夕方の子どもケアプログラムにおきかえ、日曜日や平日にも子ども向けのプログラムを数多く実施することとした。

そして、児童数が減少し、避難所統廃合などの促進への協力のため、9月末でプレハブを撤去し、現在は地元住民が仮設住宅での様々な取り組みを継続している。

◎ 事業の成果

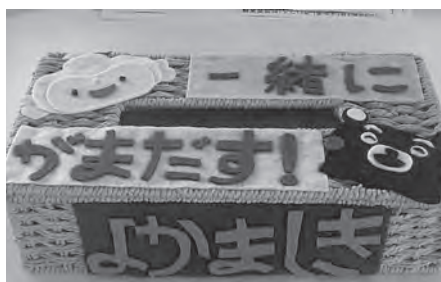
1. 子どもたちが安心して遊び・学ぶ居場所を提供することができた
2. 地元コーディネーターの雇用により、保護者や様々な被災者とのコミュニケーションを図れた
3. 益城町住民が行う活動による居場所としたため、仮設住宅移行後も住民同士が生きがい・健康づくり、子育て支援に取り組むきっかけの機会を提供できた

◎ 課題および展望

1. 放課後学習支援ニーズの分散化への対応に至らなかった
2. 益城町子育て支援NPOへの応援を継続し、復興期の子どもや子どもの暮らす地域の課題を把握し、協働のあり方を検討することにより、結果として放課後学習支援や協働のあり方について模索する必要がある
3. 岩手で継続している活動との差異を検証し、よりよい復興支援活動について模索し、今後の被災地における子ども支援のあり方について協議を重ねる



七夕まつり



子どもが来やすい環境整備(よかましきティッシュケース)



集まれ小学生! 子どもあそび

益城町の学校を応援！安心と安全を取り戻す機会づくり

～子ども、保護者、教職員を対象とした心のケア・防災教育プログラムの実施～

◎ 事業の目的

1. 子どもたちが安心を取り戻すきっかけをつくる
2. 学校防災教育のヒントや、子どもたちとの関わり方を知る機会をつくる

◎ 事業内容と活動経過

1. 子ども向け防災教育と心のケアプログラム
 - ・プリンター、時計など地震で破損した物資提供を通して学習環境整備を行い、学校再開支援を実施した。
 - ・当初実施予定だったプログラムについて、現地と調整の上、親子講演会に変更し、実施した。
 - ・益城町立益城中央小学校の教頭を中心に、校長、養護教諭との情報共有の機会を定期的に設けた。子どもたちの状況やトラウマ反応への対応についての助言を通し、間接的に小学生の支援を行った。

2. 教員・保護者向け研修会「心のケアと一体的に進める防災学習プログラム」の実施

(1) 親子講演会

- ・2016年12月1日、益城中央小学校体育館で、全校児童と保護者約700人を対象に親子講演会を実施した。

- ①テーマ：だんだん元気になろう 災害後の心の変化と回復
 - －阪神・淡路大震災時のご近所の助け合いと挨拶の大切さについて伝えた。
 - －災害後のトラウマ・ストレス反応と対処法（リラクセーション）について実践を交えて伝えた。
 - －防災学習3つの安心感を伝え、正しい備えと適切な対応により、被害を軽減できることを伝えた。

(2) 相談対応

- ・2016年9月14日、11月8日、2017年2月22日、3月2日の4日間、益城中央小学校で相談対応・講演会などの打合せを行った。

(3) 大学生ボランティア支援

- ・夏休みに益城総合体育館で子ども支援のボランティア活動に取り組む佛教大学の学生を対象に、熊本地震の被害概要、恐怖体験によるトラウマ反応と心のケア、見守り・寄り添いについて学習する機会を設けた。また、臨床心理士の高橋哲先生と共に、大学

生の活動期間の一部に参加し、子どもたちの状況と学生の活動を見た中でアドバイスなどを行った。

3. 「子どもぼうさいまつりinましき」の開催

- ・子どもたちが安心して1年後の地震発生の日を迎え、地震の報道を目にしても落ち着いて過ごせるように、心のケアと防災学習を体験しながら学べる機会として、「子どもぼうさいまつり」を開催した。
- ・社協、行政、NPO、大学生など地元団体を中心に実行委員会を立ち上げ、イベントの企画運営を行った。
- ・オープニング劇（南阿蘇村立南阿蘇中学校の原案）、防災工作体験、防災カードゲーム（ぼうさいダック）、「しまうまのトラウマ」読み聞かせ、クイズ、ハイゼックス蒸しパンづくり、水的当てなど、親子で自由に体験しながら学べるブースを設置した。
- ・益城総合体育館での炊き出しを行っていた益城町内のPTAを巻き込み、「みそ玉（味噌汁）」を提供した。

◎ 事業の成果

・継続的かつ定期的に学校を訪問し、対話を重ねることで信頼関係が構築できた。支援が必要なタイミングでご相談いただけるようになった。

・対話の中で、学校の実情や子どもたちの現状などを共有することができ、課題解決に向けて話し合いを重ねることができ、講演会などの実施につながった。

・臨床心理士や防災学習の専門家を派遣し、子どもたちの身近な存在である大人や若者が、トラウマ反応や心のケア、災害対応について学ぶ機会を設けた。心のケアと一体的に進める防災学習の理解者が地元が増えたことで、子どもたちの寄り添いにつながることで期待できる。

◎ 課題および展望

・心のケアと防災学習の継続的な実践に向けて、小学校から前向きな姿勢が見られた。継続的に学校が取り組んでいけるよう、年間カリキュラムや実施運営の検討について協力していきたい。

・「子どもぼうさいまつり」に参加していた子どもの中に、トラウマ反応が見られる子どもがいた。保護者が子どもの反応について正しく理解し、安心して見守り対応ができるよう、トラウマ・ストレス反応に対する心のケアや防災学習に関する情報を得る機会づくりの可能性を探っていきたい。



益城町立益城中央小学校での親子防災講演会の様子（2016年12月1日）



益城町で開催した「子どもぼうさいまつりinましき」事前研修会の様子（2017年3月25日）



益城町で開催した「子どもぼうさいまつりinましき」読み聞かせの様子（2017年3月26日）

母と子の不安とストレスを癒す交流の場の提供 (母と子の癒し交流サロン活動)

◎ 事業の目的

熊本地震が発生し1か月程度経過した5月の中旬頃には震度1以上の余震が1,500回に達し、過去最多を記録した。5月中旬に、連日の地震に怯えながら過ごしていた産後1か月前後のお母さんを対象に、産褥期のうつ病を検出するスクリーニング・テストを実施した結果、うつになるリスクが高いお母さんは震災前の通常期に比べ、2倍に増えたという報道があった。

この状況とニーズに応え、育児や他の様々な不安から閉じこもりがちなお母さんたちを対象に、母と子、そして同じ環境にいるお母さんたちとの交流サロンを開催した。交流サロンの活動を通じ、お母さんたちに自分が置かれている状況は自分ひとりではないことを認識させ、ママ友たちとの交流を深め、社会への活動参加に前向きに踏み出させることを目指す。

◎ 事業内容と活動経過

地元熊本県の開業助産師や育児支援関連団体の協力により、お母さんや子どもたちが興味を示す内容の母と子の癒し交流サロン活動は、2016年5月～翌1月まで22回開催し、総勢499人のお母さんが参加した。活動日時、開催場所や活動内容は下記の通り。

開催日	開催場所	主な活動内容
5月26日	さくらんぼ保育園 (熊本市東区広木町)	カラーボトルからひも解く遊びの癒し交流サロン
6月1日	さくらんぼ保育園 (熊本市東区広木町)	長い避難生活から久しぶりにゆっくり話せるママと子の癒し交流サロン
6月21日	八代市コミュニティカフェ KOKIN (八代市松江町)	妊婦から子育て中のお母さんまでが対象のお茶会とおんぶ紐の体験会
6月26日	やまなみ子ども園 (熊本市東区広木町)	骨盤ケア体操、育児相談、おっぱいマッサージ、ハンドマッサージ、沐浴、足浴などの癒しサロン
6月28日	保健福祉センター かがやき館 (熊本市北区植木町)	参加者同士が、体を動かしたり、コミュニケーションがとれる遊びを入れた癒し交流会



さくらんぼ保育園：長い避難生活から久しぶりにゆっくり話せるママと子の癒し交流サロン



やまなみ子ども園：骨盤ケア体操、育児相談、おっぱいマッサージ、ハンドマッサージ、沐浴、足浴などの癒しサロン



yoga shala mana：第1回おにぎり味噌汁の会、母乳により食事を提供、授乳相談、育児相談

7月6日	yoga shala mana (熊本市東区広木)	第1回おにぎり味噌汁の会、母乳により食事を提供、授乳相談、育児相談
7月16日	熊本市現代美術館 (熊本市中央区上通町)	ママタレントのくわばたりえさんを迎えた、笑顔にしてくれるトーク
7月30日	コミュニティスペース as a café (熊本市東区山ノ内「あやの里」内)	体操で体をほぐしたり、アロマでリラックス
8月27日	コミュニティカフェ COMMUNE6 (熊本市東区戸島西)	耳つぼジュエリーの体験を通じ、体の発達、心の愛着形成などの話

※以下省略 2017年1月28日まで22回実施

◎ 事業の成果

多くのお母さんは、当初本活動に参加することに躊躇していたが、地元の協力団体のネットワークにより、お母さんたちに参加への呼びかけをした。その結果、延べ500人近いお母さんたちが参加し、当日は会場内で涙ぐむ人もいたが、徐々に笑顔を見せ明るい表情に変わっていった。

産後のうつの最悪な結果は自殺とされているが、ひとりにさせない、孤立させない、不安や悩みを皆で共有することがとても大事なことである。

本助成事業で実施した「おにぎり味噌汁の会」はわずかな予算で実施でき、お母さんたちの母乳育児指導にも大きな役割を果たし、多くのお母さんたちに喜ばれている。助成事業は収束しているが、現在新たな助成団体の支援で活動を継続している。

◎ 課題および展望

外見上は、熊本地震後の復興がかなり進んでいるように見えるが、今でもお母さんたちと地震当時の話題について話をすると、涙ぐむ人がまだいる。お母さんたちの心のケアとカウンセリングの継続の必要がある。

産後うつ病の疑いのお母さんと新生児の訪問カウンセリングケア (助産師の家庭訪問による産婦・乳幼児支援活動)

事業の目的

熊本地震が発生し1カ月程度経過した5月の中旬頃には震度1以上の余震が1,500回に達し、過去最多を記録した。5月中旬に、連日の地震に怯えながら過ごしていた産後1カ月前後のお母さんを対象に、産褥期のうつ病を検出するスクリーニング・テストを実施した結果、うつになるリスクが高いお母さんは震災前の通常期に比べ、2倍に増えたという報道があった。

産後のうつ症状是最悪の場合自殺に陥ってしまう事例もあるので、その状況に至らないよう予防するためにスクリーニングされたお母さんたちを対象に、助産師による新生児家庭訪問活動を行い、育児や子育てに関する個別相談を実施するとともに、様々な不安を抱えているお母さんの心的カウンセリングケアを行う。

事業内容と活動経過

助産師による新生児家庭訪問活動は、母子保健法に定められた新生児訪問指導と乳児家庭全戸訪問事業の一環として実施しているので、助産師会が災害地域の地元自治体からの委託事業として実施した。最終的に417名のお母さんに対し、育児や様々な不安に対する個別相談、授乳マッサージなどを行いつつ、寄り添いながらお母さんを孤立させない、心的カウンセリングケアを行った。必要に応じて複数回家庭訪問も実施した。

災害時の地元自治体は避難所の住民に対する情報提供や対応などで、あらゆる業務が混乱していた。その状況の中で、自治体の本来業務である新生児家庭訪問活動まで手が回らず、助産師会へ委託する予算もなく、また個人情報保護法の名の下で、スクリーニングされたお母さんたちの情報を提供することに躊躇していた。ジョイセフと助産師会との連携支援活動について再三の説明と交渉の結果、助産師会への委託事業として実施することが実現した。

事業の成果

助産師による新生児家庭訪問活動の実施は実現できたが、被災自治体との交渉に時間がかかり、支援活動の開始時期がやや遅くなった。また、被災自治体の委託事業として限定した地域のみ（熊本市、嘉島町、益城町）の支援活動となった。

新生児家庭訪問した多くのお母さんたちは、地震による不安と母乳が出ない授乳の不安と悩みなどを抱え、孤立していた。助産師による育児相談、授乳指導（乳房マッサージ）と心的ケアを通じ、お母さんたちは徐々に心を開くようになり、さらなる個別相談や個別指導の実施要望が多くあった。

新生児家庭訪問活動の実施だけではなく、別の助成事業である「母と子の癒し交流サロン活動」へ誘導した。孤立させない集団による交流サロン活動への参加により、多くの不安を抱いていたお母さんたちが笑顔を見せるようになった。3月の振り返り会に参加したお母さんたちは、「今の明るい自分があるのは新生児家庭訪問に来てくれた助産師さんのおかげです。」と笑顔を見せながら語ってくれた。

課題および展望

災害時に社会的に最も弱者である妊産婦と子どもへのサポートは、相変わらず後手後手になっている。その妨げの一部になっているのは行政の壁かもしれない。すぐにでも手を差し伸べる必要があっても、なかなか思うように実現できないのが現状だ。



新生児家庭訪問活動



振り返りの会

熊本地震救援活動・天草ショートステイ被災地ママ受入事業

◎ 事業の目的

地震発生当初は食料、水、生活物資不足で普通の生活もできない状態だった。現在は多くの救援で不便ながらも元の生活に戻りつつあるが、その反面、地震の恐怖、余震、それに伴う被災生活の影響などで被災者は精神面への影響は大きく、対応は急務である。特に母子や高齢者などの社会的弱者は精神的かつ身体的疲労が生じている。

その心身の不安を解消する目的で、これまで当団体は被災地各団体と連携を持ち景観が豊かな土地柄を活かし被災者を無料でショートステイで受入れ、心のケアに取り組んだ。

◎ 事業内容と活動経過

ママ応援センターでは、4月25日まで休館での対応を行ったが、その間も被災地ネットワーク団体と連携を図り、ボランティアにて社会的弱者（障がい児を抱える親子、シングルマザー、妊婦など）の被災者を対象にカウンセリングや水・ミルク・おむつなどの物資の提供を行った。

また、休館中にも利用者から電話による相談が多く、家に居るのが怖い・子どもが泣きやまない・買い物に行けない・いつ施設が再開するのか?などの問い合わせが相次いだ。

上天草市では余震が続くものの、地震による大きな被害は少なく、上益城や熊本市などから実家に避難してきた利用者もあった。また、家族が仕事に行っている間、母子だけで家に居るのが恐いのでママ応援センターを利用するといったケースが非常に多かった。4月26日の施設再開以降は、本格的な支援体制を整えるため、専属のカウンセラースタッフを配属し、被災地での直接のカウンセリングを行った他、電話による相談、また、被災者が気軽に相談できるようSNSでのコミュニティグループの作成を行い対応に当たった。度重なる余震に加え、6月には記録的な豪雨被害もあり、避難生活や車中泊の疲れから、「震災後、5歳の子どもの情緒不安定となり幼稚園で他の園児に粗暴になり、通園を見合わせて一日中傾いたアパートに閉じこもっている」「避難所で子どもが騒ぎ2日間だけしか居られず、その後は軽自動車に母子3人で車中生活をしていた」「シングルマザーで子どもを産んだので親にも頼めず地震後ますます孤独感に陥り自殺まで考えた」など、中には複雑かつ深刻な相談や、避難生活初期には気丈に振る舞っていたが、困難が長期化

するにあたり日に日に気分が落ち込んでいく被災者からの相談も多かった。

特に避難所では様々な環境の被災者が共同生活を行う中で、障がい児を抱える親子、シングルマザー、妊婦などの社会的弱者は周囲に気兼ねすることが多く、圧迫感や劣等感で大きなストレスを抱えていた。

当団体ではこうした被災者の一時受入として、天草ショートステイ事業を企画。特に深刻な問題を抱える家庭を対象に上天草市内の宿泊施設への無料招待を行った。

宿泊施設は協力者の経営するバンガローを格安で提供していただき、利用者の食事やアメニティは利用者自身の持込みで対応を行った。ショートステイでは集中的なカウンセリングを実施。周囲に気兼ねすることなく家族だけの生活空間の中で、心の落ち着きを取り戻してもらうことができた。また、他団体が企画する野外体験活動などに積極的に参加を促すことで、親子や家族とのふれあいのきっかけを持ってもらい、心のケアを図った。

参加者からの評価も高く、「海を眺めて心が落ち着いた」「徐々に羽を伸ばすことができた」「子どもたちもぐっすり眠ってくれた」、普段ビニールシートが覆いかぶさった被災地での景色と比べ、有明海に広がる景色を眺め「同じ青でも海の青だね」などの感想をいただき、大変喜んでもらった。…以下略

◎ 事業の成果

○ショートステイの受入状況は以下のとおり
 (受入先：上天草市大矢野町 あまきレジャーパーク運営施設バンガロー) 4月30日～9月26日 127件 312人

◎ 課題および展望

地震発生直後から様々な協力・支援団体と連携を組み、悩んでいる人、心が苦しい人、問題を抱える家庭、障がい者、高齢者を抱える家庭などのカウンセリングに従事することで信頼関係が構築でき、スムーズなショートステイへの利用促進に繋がった。

カウンセリングだけでは直接的な解決に至らないケースもあり、様々な団体が得意分野を連携させながら問題解決に取り組むことが重要。



宿泊施設の様子：震災当初はベッドや自炊ができる環境が大変喜ばれた



親子でのんびり過ごす様子：地元新聞社から活動への取材を受けた



野外活動の様子：自然体験を通じて心のケアを図った

熊本地震で被災した中学生・高校生に対する 学校外教育クーポン提供事業

事業の目的

■支援対象

被災による教育格差の解消：熊本地震の被災地での、経済状況の違いによる学校外教育の機会の差は大きい。また、震災直後の無料学習支援の継続も難しく、特に今年度の受験生に関しては、進路に大きな影響を与えるため、支援の緊急度が高い。

事業内容と活動経過

熊本地震で被災した130名の受験生(中学3年生・高校3年生)に、一人当たり10万円分の学校外教育クーポンを提供し、子どもたちが安心して学び続けることができるようサポートした。

■時期

2016年5月1日～2017年3月31日

(クーポン利用期間：2016年8月1日～2017年3月31日)

■支援対象者 熊本地震で被災した中学3年生、高校3年生130名
※住家全壊・半壊被害または主たる生計維持者が死亡した世帯の子ども(受益者の内訳)

学年別 中学3年生：90名 高校3年生：40名

地域別 熊本市：66名 上益城郡：53名 阿蘇郡：5名

宇城市：4名 宇土市：1名 合志市：1名

被災状況 住家被害…全壊：47名 大規模半壊：27名 半壊：56名
人的被害…主たる生計維持者の死亡：2名

■審査方法

書類審査：エントリーシート、罹災証明書などの被災を証明する公的書類を提出 審査基準：被災状況(住家被害、人的被害)

■クーポン給付額

一人当たり10万円分(総額1,300万円分)

■クーポン取扱事業者数

146教室(学習塾、予備校、通信教育、習い事などの学校外教育機関)

■運営体制

実施主体：公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン

協力：特定非営利活動法人ブレンヒューマニティー

(利用者申込受付事務局業務など)

熊本県教育委員会、熊本市教育委員会

(学校などを通じた利用者募集への協力など)

事業の成果

■事業目標の達成状況：

【当初の目標】

迅速に被災地での支援体制を構築するとともに、必要な資源を調達

し、初動として40名の子どもに学校外教育クーポンを提供する。

【目標の達成状況】

総勢130名の子どもたちに学校外教育クーポンを提供できた。

■事業実施によって得られた成果：

・146の教育事業者との支援ネットワークの構築。

(卒業後進路調査)

・中学3年生の100.0%が高校に進学(80名/80名)

・高校3年生の86.2%が大学などに進学(25名/29名)

・中学3年生・高校3年生の83.5%が希望する進路に進学(91名/109名)

■成功したこととその要因

・教育委員会、学校と連携して子どもたちに対して幅広く支援情報を届けることができ、被災した子どもたちに対して、迅速に支援を届けることができた。

・東日本大震災被災地における同様の支援実績やノウハウを有していたことが成功要因である。支援の制度設計(対象者の応募資格、審査基準など)も1週間程度で設計することができた。また、教育事業者への説明や契約のために必要な資料も、東北支援で使用していたものをベースに活用することができたため、スムーズに協力体制を構築することができた。さらに、2015年に当法人が発刊した「東日本大震災被災地・子ども教育白書」の調査結果についても、地域との連携体制を構築するうえで大きな役割を果たした。

課題および展望

■課題

・2016年にすべての避難所が閉鎖され、各家庭は生活再建に向けて歩みだしている。一方で、家財の買い直しや引っ越しなど、現在は最も経済的に苦しい時期でもある。

・特に低所得家庭は、被災の影響を受けやすく、復興が遅れている。2017年以降も多くの子どもたちが経済的な理由によって塾などで集中して学習に取り組むことができない恐れがある。これらの状況を考慮して、当法人では2017年度も熊本での活動を継続する決断をした。(当法人の推計によると、住家全壊被害を受けた小学生～高校生は2,300名)

■方針

・被災直後の2016年度は直接被害の大きかった世帯の子どもたち(住家全壊・半壊被害、人的被害など)を支援した。2017年度は直接被害を受けた子どもの中でも、低所得世帯の子ども(中学3年・高校3年生)に特化して、学校外教育クーポンを提供する。

・クーポン提供額は、2016年度は一人当たり年額10万円だったが、2017年度は20万円に増額し、子どもたちが充実した学びの機会を得られるよう支援する。



被災地視察時(2016年5月)：被災地を訪問し、現地のニーズ確認をするとともに、自治体との連携体制を構築した



CFCクーポン：塾や習い事などに利用できる学校外教育クーポン(CFCクーポン)を発行した

熊本の震災に伴う、熊本YMCA指定管理受託先である、益城町総合運動公園内避難所、および周辺における被災者支援の一環としての、「子ども向け、プレイパーク、およびプレイルームの運営」

◎ 事業の目的

支援対象：益城町総合運動公園内避難所あるいは近隣で車中泊・テント生活をしている子どもたち
解決したい課題：子どもたちに運動・ゲームなどの安らぎの場を提供することにより、心の不安を取り除き、家族の生活の安定を図る。

◎ 事業内容と活動経過

活動開始時期：2016年4月21日
事業内容：特定非営利活動法人「ワールド・ビジョン・ジャパン」、およびNPO法人「子育て応援 おおきな木」と協働でプレイルーム／プレイパークを運営。プレイルーム（室内）とプレイパーク（屋外テニスコート5面）とも月曜～金曜と土曜、日曜の対象年齢層を分け、保育士などの専門家が常駐してゲームやスポーツで子どもたちに寄り添う活動を行った。

◎ 事業の成果

震災後、5月のゴールデンウィークまで続いた学校閉鎖に伴い、子どもたちは震災のトラウマと闘い、そのことが子どもたちの大きな心理的ストレスとなり、特に最大の被災者を抱えた益城町総合運動公園では子どもたちに、以下のような行動が現れた。

- ・昼間は落ち着いているように見えるが夜は母親にしがみつけないと眠ることができない。
- ・急に大声を上げる。

そういう状況で、日常の子どもたちのケアを専門とするYMCAと、非日常時における心理的な対応を得意とする「ワールド・ビジョン・ジャパン」、地元とのつながりのある「子育て応援 おおきな木」との協働によって運営した屋外のプレイパーク、および屋内のプレイルームは利用する子どもたちと保護者にとって大きな安心となり、結果として子どもたちが心理的な安定を得られたのみならず、その子どもたちが施設の清掃を始めたり、高齢者の面倒をみるというような行動につながり、避難所という特殊な環境での避難者全体のストレスの軽減をもたらすことができました。

◎ 課題および展望

子育て支援はすでに地元NPO「子育て応援 おおきな木」に全面的に委ねられ、益城町総合体育館の敷地内、および仮設住宅にてプログラムの提供が続いている。

避難者が仮設住宅に移転した現在は、子どもたちには引き続き大きな心理的ストレスが生じることが予想され、各団体間では引き続き情報を共有しながら、継続して必要な支援を提供する必要がある。また、今春より全国6カ所のYMCAで「ワールド・ビジョン・ジャパン」による「子どものための心理的応急処置研修」が実施され、今後生じ得る災害での子どもたちやその家族のニーズに、より効果的に対応する準備を進めている。



敷地内総合体育館の2階に設けたプレイルーム



敷地内テニスコートに設けた子どものためのプレイパーク



プレイルームにYMCA日本語学校の学生が訪問、触れ合う。

GAMADASE ART PROJECT_がんばれ熊本!学習支援

◎ 事業の目的

(支援対象) 熊本県八代市鏡町や八代郡氷川町の被災した小学生、中学生、高校生を対象。
2016年4月の熊本地震により子どもたちも車中泊や避難所生活を余儀なくされ、学習環境や学習時間が限られる中、被災による精神的ストレスもあり学習の遅延が考えられる。仮設住宅ができ、長期的避難生活に入った子どもたちは学習環境だけでなく、家庭の経済面でも支援が必要である。学習塾にも通えない状況の中、学べる環境を整え、同じ状況の子どもたちが集い励まし合いながら学び合い、学習の遅延を克服し不安や絶望ではなく、学習意欲向上や進学など将来への希望を感じてもらうことを本事業の目的とした。

◎ 事業内容と活動経過

(内容) 熊本地震により避難所生活を余儀なくされ、自宅が損壊するなど学習環境や学習習慣が乱れ学習が遅延する中、心のケアが必要と考えられる子ども向けに、熊本の被災地で学習支援活動やワークショップなどが継続的に行える拠点整備を行った。また被災現地の熊本や他県を含む支援ボランティアと連携協働し避難所や仮設住宅などで被災住民向けの支援活動を行った。
学習支援活動としては2016年の夏(7月3日)から翌2017年3月末まで被災現地(熊本県八代市)の学習塾などと連携協働し通常の時間外で独自の学習支援活動を八代郡氷川町や八代市鏡町の被災した小学生、中学生、高校生を対象に行った。
(方法) 学習支援のスタッフには現役の学習塾講師や教えた経験のある学生を臨時の講師として派遣。
(期間・場所) (派遣プログラム) 2016年7月3日から2017年3月26日の毎週日曜日などで被災した子どもたちを対象に無料で学習支援事業を実施した。(MMIX熊本ベースキャンプ2F:八代市鏡町鏡32)
(連携被災者支援プログラム) 2016年度の夏休み、冬休み、春休み期間中などで子ども支援事業などを実施した。(熊本県益城町、御船町、八代市、宇城市、氷川町などの避難所や仮設住宅など)

◎ 事業の成果

熊本地震直後に本団体代表の出身地である熊本県八代市に緊急支援の活動拠点「MMIX 熊本ベースキャンプ」を設置した。4月17日から東日本大震災支援のネットワークを活かし宮城県仙台市をはじめ、全国からの支援物資のためのストックヤード(55平米)やボランティアの宿泊や学習支援などの活動拠点(40平米)として活用した。被災した子どもたちの受け入れ学習スペースと被災地の学習支援講師を確保し、被災地(熊本県八代市)の学習塾とも連携し、学年に合わせた学習支援を、当初は夏休みと冬休みだけを想定していたが子どもたちからの要望もあり、7月から翌3月末まで毎週日曜日無料で実施した。また被災地の学校や自治体(八代市、宇城市、八代郡氷川町など)、社協などの担当者とも連携協力し被災者支援事業を継続実施している。

◎ 課題および展望

2011年の東日本大震災から6年が過ぎたが、未だ問題は多く、仮設住宅や災害公営住宅での孤立化やうつ、孤独死も止まらない。仮設住宅から災害公営住宅へと転居が進み、住環境は整いつつあるが、被災住民に対しては孤立やうつ、孤独死などを回避するような心のケアが今こそ必要である。東北でも未だ不安を感じている転居した被災住民からも住民交流型の支援事業の継続依頼は多い。熊本地震の被害状況からも仮設住宅やみなし仮設住宅など応急の住宅での生活が長期化することは予想される。子どもたちも避難先など生活環境が変わり、不安定な生活が続く中、交流型で希望の持てる長期的な「心のケア」が必要である。一過性のイベントではなく、多くの支援活動をNPOや自治体、まちなどと連携、協働し、蓄積された支援のノウハウや人脈を活かし、そのノウハウなどを共有しながら被災住民と役割分担をし、自治会が整い住民主導で活動ができるようにコミュニティ構築支援事業を被災住民と伴走型で継続実施していくことと復興支援リーダーの人材育成の必要がある。



被災した子ども向け学習支援活動:被災した小学生、中学生、高校生を対象に無料で実施



GAMADASE ART PROJECTロゴマーク



仮設住宅子ども向けワークショップ(益城町)

ココロとカラダのケア・サポート事業

◎ 事業の目的

対象：熊本地震で被災された、主に熊本市内地域の親子

課題1：子どもだけでなく、周囲の大人を含めたココロとカラダのケア

予期せぬ二度にわたる大きな揺れの後、長期にわたる余震で被災者の不安感が強く、子どもの中には震災時に就寝しておりその時の記憶を持っていないにもかかわらず、テレビや周囲の大人の会話などに影響を受け疑似体験し恐怖感を増幅しているという現象も見られた。そこで子どもだけではなく、周囲の大人も含めたストレスケアが必要であると考え、震源地から少し離れた近隣の揺れの少ない地域への外出支援、体験会やお話会など気分転換の場を提供し、ストレス緩和を目指す。

また、被災者自らがボランティア活動をしているケースもあり、適切な休息やストレス回避ができにくく、ストレスの蓄積が懸念される。相互に支え合いながら長期的なサポートが持続できるよう、子ども、大人、支援する側、される側といった区別なく、心と身体へのケアを行う必要がある。

課題2：長期にわたる支援活動の基盤づくり

阪神淡路大震災では、震災後に心のケアを目的として兵庫県独自の音楽療法士の認定制度を設け、そこで育成された多くの方が現在でも支援活動を続けておられる事例がある。熊本地震でも心のケアは長期にわたるサポートが必要となることから、周囲をケアしながら自らをも癒していく相互支援のあり方に学ぶ点が多くあると考え、音楽療法の視点を取り入れた研修を実施し長期にわたる支援の基盤を作る。

◎ 事業内容と活動経過

課題1に対する活動：震災の恐怖を身体が記憶しており、余震により地震の恐怖がフラッシュバックし、身体が硬直する、夜が怖いといった被災者の声があった。阪神淡路での震災経験のある音楽療法士と共に避難所に開設された子育てひろばを訪問し、その場の状況や被災者の感情に寄り添いながら、楽器に触れたり一緒に歌を歌ったりすることで心身を解放するための活動を実施した。

また、音楽にボディワークを取り入れたワークショップやアウトドアの体験会、お話会や絵を描く会など、子どもと大人が一緒になって体験を共有できる場を開き、自己解放を通して不安軽減を図る

活動を実施した。

課題2に対する活動：自らも被災者でありながら、被災地ボランティアとして音楽を通じた支援をされている方が多く、その活動の中に「音楽療法」の視点を取り入れることで支援の質が高まることが期待され、兵庫県音楽療法士会の方を招き、被災地での活動経験を通じた具体的な支援のあり方や、被災者・支援者の別なく心に寄り添う音楽療法について学びの場を設けた。

◎ 事業の成果

震度7の地震体験は身体記憶であるためその払拭には長い時間がかかると言われる。

被災者と支援者、大人と子ども、といった垣根を設けず活動を実施したことで、「楽しい」「嬉しい」「美味しい」「気持ち良い」といったポジティブな感情を共感体験することができ、ストレス緩和に有益であった。

音楽療法セミナーを通じて、声や音の大きさ、言葉や静寂(間)、視線や色など、様々な効果を使いながら、対象の方に寄り添っていく支援のあり方を学ぶことができた。この学びをベースに家庭内や地域コミュニティで、あるいは仮設訪問時などコミュニケーションツールとして音楽を活用している事例もあり、長期にわたる相互支援そのものを支える活動ができたと考える。

◎ 課題および展望

子どもたちの深刻な心の問題は震災後2～3年時に出てくるといった神戸の事例があり、震災1年を経て被災者支援活動も減っていく中、震災のトラウマがこれから次々と顕在化していく懸念があり、息の長い支援が必要である。

身近な場所に「つながりの場」を様々に設け、参加することで何かしらの心と身体のリフレッシュを可能とすることで、大きな問題の発生を防ぐことができると考える。

これからも支援者・被災者の垣根を越えた繋がりや輪を広げていきたい。

第3回決定分（6月29日発表） 助成事業一覧

ページ	団体名	所在地	申請事業名	活動地域
27	一般社団法人 あいむあーす	熊本県	里づくり	熊本市
28	Upple	福岡県	益城町と北九州の子どもたちの笑顔をつなぐプロジェクト「ましきたKIDs CAMP」	益城町
29	特定非営利活動法人 いるかねっと	福岡県	熊本地震後～2週間までの小学校避難所の状況を通して学校における災害対策を考える	熊本市
30	認定特定非営利活動法人 カタリバ	東京都	益城町立益城中学校における学校再開支援	益城町
31	特定非営利活動法人 キャンナス	神奈川県	熊本被災地、子どもと親の笑顔あふれる心のケア	益城町
32	公益社団法人 こども環境学会	東京都	被災保育園（幼稚園）の保育環境正常化のための緊急アドバイス支援	益城町、御船町、熊本市
33	一般社団法人 コミュニティ・カウンセラー・ネットワーク	東京都	「自分でできる、お互いにできる、ずっとできる心のケア」教育	熊本市
34	特定非営利活動法人 鍼灸地域支援ネット	滋賀県	地震ストレスにて情緒不安定な就学前児童に対する小児はりと保護者への鍼灸マッサージ活動	熊本市、益城町、宇城市、御船町、西原村
35	特定非営利活動法人 スポーツクラブ・エスペランサ熊本	熊本県	肥後っ子支援活動事業	氷川町・宇城市・八代市
36	一般社団法人 体力メンテナンス協会	東京都	「熊本地震」で被災された方への産後トータルケアプログラム（出産後に不安定になっている、ママの心と体をトータル的にケアし、支えるプログラム）	熊本市
37	寺子屋カフェ	熊本県	こども食堂「寺子屋&ママさん爆睡カフェ」の定期開催	熊本市
38	なないろネットワーク熊本	熊本県	益城の小・中学校の子どもたちへの支援（学習支援及び必要な備品や物資、ランドピアノなどを届けよう）	益城町
39	はぐくみ・コミュ	熊本県	居場所づくりによる子どもと保護者などの心身のケア	熊本県
40	特定非営利活動法人 NPOホットライン信州	長野県	熊本地震で被災した子どもらへの支援活動	熊本市

里づくり

◎ 事業の目的

『おかえり』、『ただいま』と言って帰る場所＝里』を作り、『共に』過ごし、笑い合える場を提供し、心身共に癒される時間づくりを行う。(中長期的には、誰もが帰ることのできる「里」ができ、復興後も継続することで、熊本の人々が「繋がり」、「共に生きる」ことを目指す。)

◎ 事業内容と活動経過

- 1 子どもの居場所作り(子どもたちが気軽に集える場所を作る)
 - (1) 若葉コミュニティセンター…毎週金曜日開設(第三金曜日を除く)。
 - (2) 味噌天神公民館…毎週月曜日開設。
- 2 孤食から共食へ
 - (1) 一緒に作って一緒に食べる。(だご汁の団子作り、おにぎりを握るなど)
 - (2) 「いただきます」のあいさつをみんなでし、友だちや大人と一緒に食べる。
- 3 栄養バランスのとれた食事の提供
栄養士による野菜中心の調理。
- 4 お手伝いできることを体験し、家族の一員であることの喜びを感じさせる
 - (1) 利用する公民館などの清掃活動。
 - (2) 調理道具など運搬の手伝い。
 - (3) 自分で配膳し、友だちの分も手伝う。食器の片づけ。
- 5 学習できる環境を整える
 - (1) 宿題を済ませて帰る。
 - (2) 調理を手伝い自分で作ることを楽しみながら体験する。
- 6 遊びの提供
保育士による遊びの提供。
- 7 その他
様々な職種の人のお話を聞くことにより、いろいろな価値観を知る体験をする。
(看護師、栄養士、保育士、囲碁6段有段者、医大生)

◎ 事業の成果

- 1 計画ではアパートや一軒家を借りる予定であったが、被災者が優先だと考えたため活動開始が遅くなった。発想を変えて公共施設のコミュニティセンター、公民館を借りた。毎回、調理道具を持って行く煩雑さはあったが、快く貸してくれる2か所(中央区、東区)があり定期的に継続して居場所作りができた。

- 2 食卓を囲むことで食の質が上がり心も豊かになる。週に1回でもその機会があると健康で生き生きとした生活を送ることにつながっていき、回数を重ねるたびに笑顔になってきた。会話の中から家族構成、お母さんが帰宅する時間、夕食のことを聞き取ることができ、家族分の食糧を渡すこともできた。

- 3 バランスのとれた野菜中心の料理が提供できた。「みそ汁」は毎回必ず提供した。発酵食品を摂取する大切さを直接子どもたちに話して聞かせることができた。

- 4 無理せず自分でできる手伝いをすることによって、「ありがとう」と大人から声をかけられうれしそうな表情になる。自己肯定感が向上することに結びついたと考えられる。

- 5 宿題を教え合う場面が見られた。また、調理の体験は自信につながっていき「また作りたい」という意識の向上にもつながった。

- 6 子どもたちの明るい笑い声が部屋中に響いた。かまってもらえる時間を過ごすことができた。

- 7 「どうやったらなれるの?」と職業についての質問が出た上で、「自分は〇〇になりたい」と話をしてくれ、大人が継続して励ますことにより表情が明るくなってきた。

◎ 課題および展望

- 1 二つの「里」が継続して利用できるように、身近な周りの方(地域の方)に少しずつ引継いでいき、私たちはまた別の場所で新しく同様の活動を展開していく。
- 2 熊本市内で同じ思い(「共に」過ごし、笑い合える場を提供し、心身共に癒される時間づくりを行う)で活動を実施している団体と情報提供し合い、どこにどのような居場所があるのかマップを作成し「見える化」を図る。行政に情報提供する。
同じような思いで活動を始められる方、始めたいと思っている方の所へ出向き、不安を払拭できるよう相談相手になりながらサポートを行っていき、他の団体とも連携し、「一校区に一つの里があること」を目指す。
- 3 子どもがご飯を食べ、落ち着いて学習できる環境を「里」の中で作る。学習支援ボランティアを見つけ、信頼関係を築きながら継続しての学習支援ができるようにする。
- 4 目標とする大人の存在を見つけ出せる工夫をする。様々な職種の大人と話をしたり触れ合うことで、将来展望の改善を図る。「なりたい自分」になれるよう対話や会話を重ねる。



若葉コミュニティセンターの清掃活動:「ただいま」と入ってきてすぐにコミュニティセンターの清掃の手伝いを進んで行っている



味噌天神公民館での食事の様子:一緒に作って一緒に食べているところ



若葉コミュニティセンターでの食事の一例:だご汁のだごは、子どもたちが自分でちぎって作った

益城町と北九州の子どもたちの笑顔をつなぐプロジェクト 「ましきたKIDs CAMP」

事業の目的

1. 支援対象：熊本県上益城郡益城町在住の小中学生
2. 解決したい課題：熊本県上益城郡益城町の小学校に通う子どもたちの22%が心のケアが必要と発表。また、地震の影響により「遊び場」の減少や家族の多忙も重なって、十分な「遊び」の時間の確保もできず、ストレスフルな状況がある。そこで、子どもたちを安心・安全かつ自然豊かな地へ招待し、ストレスフリーな生活を提供。また、併せて北九州の子どもたちとの交流を行い、5年、10年続く関係性を構築する。

事業内容と活動経過

1. キャンプ「アスマイルキャンプ」

- (1) 場所：北九州市若松区大字竹並 玄海青年の家
- (2) 日程：平成28年8月8日～10日（2泊3日）
- (3) 対象：益城町の小学生（3年生～6年生）13名（1名体調不良にてキャンセル）【招待】
- (4) 参加者：福島県南相馬市の小学生14名【招待】
北九州市の小学生15名
- (5) 内容
 - ①1日目（8月8日）：3か所の子どもたちが集合。7つの班に分かれ、アイスブレイク。その後にカヌー体験。夕食は自分たちで火おこしから行いカレーづくり。飯盒炊爨も実施。夜はテント泊。子どもたちは協同体験により仲が深まり、大学生スタッフとの距離も近づいた。
 - ②2日目（8月9日）：朝よりウォークラリーをしながら海水浴場へ。海水浴では、参加者同士や、スタッフとの水の掛け合い、大型浮輪を使った遊びなどで盛り上がった。休憩中にはスイカ割りも実施。昼食は弁当。海水浴終了後はゆっくりと休憩。夜は、キャンプファイヤーでゲームをしたり、2日間を振り返ったりしながら楽しんだ。
 - ③3日目（8月10日）：近隣の大きな公園「グリーンパーク」でミニ運動会。天候にも恵まれ、晴天の中で障害物競走や二人三脚などで交流を深めた。午後からは、最後のプログラムとして、東北、熊本、カンボジア、北九州の子どもたちの笑顔をつなぐ「SmilinkAction」を実施。チャレンジしたいことを描き、共同作品を作った。

2. キャンプ「英語de Camp」

- (1) 場所：北九州市小倉南区平尾台 ひらおだい自然塾の家
- (2) 日程：平成28年8月17日～18日（1泊2日）

- (3) 対象：益城町の中、高生6名【招待】

- (4) 参加者：北九州市の大学生10名

国際ワークキャンプ北九州参加者7名（東京3名、山口、台湾、スロバキア、香港）

- (5) 内容

①1日目：参加者集合。英語を使って自己紹介。2日間をどのように過ごすかを話し合った。午後からは「牡鹿鍾乳洞」の探検と平尾台自然の郷へ。外国人や学生との交流を深めた。夕食はカレーづくり。火おこしから調理まですべて参加者で実施した。夜は寝袋で就寝。

②2日目：この日は平尾台最大の観光洞「千仏鍾乳洞」へ。午後からは、カルスト地形が望める「茶ヶ床園地」にてピクニック。ゆっくりと自然を満喫しながら、対話した。最後には、「SmilinkAction」を実施。チャレンジしたいことをそれぞれに発表した。

事業の成果

- ・熊本地震によって被災し被害の最も大きかった益城町の子どもたちがキャンプの期間だけは羽を伸ばして遊ぶことができた。
- ・益城町の子どもたちが福島の子供たちとの交流を通して、被災の状況を子どもたち同士で共有。自分の置かれている環境について考えるきっかけとなった。
- ・大学生や外国人との交流により、未来になりたい姿のモデルとの出会いとなり、価値観を広げるきっかけがくれた。
- ・北九州市民が、市民レベルでの交流を通して、熊本地震の状況を知り、熊本に再度目を向けるきっかけとなった。

課題および展望

仮設住宅への引っ越し後の遊び場の確保の課題は継続。コミュニティの形成が進む中で、今回かわりが持てた子どもたちとの交流を続け、益城町とは協力団体であるNPO法人カタリバが日常に学習支援に入っていることもあるため、子どもたちの日常と当活動がどのようにリンクされているかの状況把握をしつつ、今後の活動の展開を検討する。



アスマイルキャンプ集合写真：益城、福島、北九州の子どもたちとキャンプ地でミニ運動会後に撮った集合写真



英語deCampでのヒトコマ：国定公園「平尾台」で外国人スタッフたちと散策のあとに撮った1枚

熊本地震後～2週間までの小学校避難所の状況を通して 学校における災害対策を考える

◎ 事業の目的

4月14日、マグニチュード6.5の地震が発生し、熊本県益城町で震度7を観測した。その28時間後の4月16日には、同じく熊本県熊本地方を震央とする、マグニチュード7.3の地震（本震）が発生し、熊本県西原村と益城町で震度7を観測した。死者81名、負傷者1,684名、避難者数（最大時）183,882人、経済損失4.6兆円に上る被害をもたらした。

住宅の全壊が8,336棟、半壊が26,333棟、一部破損が126,289棟確認され（7月19日現在）、鉄道、バス、航空、交通インフラの損傷により物流が停止した。小学校、中学校、高校、大学などの学校が避難所となり、震災後1週間までは避難所の中心となった学校では、行政、自衛隊のサポートが行き渡らなかった。避難所運営にあたっては夜間に避難される方だけではなく、朝昼夕の食事提供時だけ避難所に来られる方への食事提供、物資の確保、夜間の物資の受け入れまでも校長、教頭、教職員が行っている状況に直面した。

他の場所で災害が起こったときに、二度とこのようなことが無いように、記録に残すため熊本市内98校にアンケートを配布し、31校から返答を頂き、その記録を基に報告書を作成し活動報告を行った。

◎ 事業内容と活動経過

熊本市内の小学校避難所（およそ2万人の避難者）の運営にあっていたのは学校職員であった。避難所運営のための物資の確保に頭を悩ませておられたため、震災後4日目～10日目で50校弱の学校に物資輸送の活動を行った。

【物資輸送に関して】

- ① 熊本市内の小学校にニーズ調査の電話をさせていただく。（朝～夕方）活動者4名
- ② 必要なものを当団体、職員が購入。（夕方）3名
- ③ 物資輸送メンバーが、福岡から熊本へ運ぶ。（夜）10名
熊本市内の小学校を対象に延べ200校に連絡、50校弱に物資を提供。

【活動経過】

震災後4日目：現地調査を兼ねて熊本入り。5日目：明日食べるものがないという熊本市立一新小学校に対し物資輸送を実施。6日目：熊本市内の東区、中央区の小学校へ明日、食べるものの支援実施（7校）。7日目：11校の学校に衛生用品、お米の支援を行った。8日目：避難所運営の困難さを訴える学校に対し、電子調理器具（電子レンジ、調理器、炊飯器）をお送りした。11日目～14日：介護福祉士会の派遣により益城町の避難所運営に携った。15日目：再度、熊本に入り翌日の朝食のパンの輸



物資輸送時の写真：物資輸送時ミーティングをする光景（熊本市内・震災後6日目）



活動報告会風景：災害系NPO、福祉関係者、議員さんもお出席いただいて出席者全員で災害対策について話し合った



活動報告書：仙台市、福岡市担当課、他NPOなど多くの団体からの情報提供で作成された

送を行った。

【熊本地震後～2週間までの小学校避難所の状況を通して学校における災害対策を考える報告書作成にあたって】

- ① 作成における調査、情報のとりまとめ
- ② アンケートの配布（6月 熊本市内小学校98校を対象とした）
- ③ アンケートを基にした報告書の作成
仙台市、福岡市などの担当者と話させて頂き、報告書のとりまとめを行った。
- ④ 報告書の配布 政令指定都市の担当者、福岡市、県関係部署、福岡市内小学校150校、福岡市内公民館70校に配布を実施。

◎ 事業の成果

熊本市内98校の小学校避難所にアンケートをさせていただいた。その中で、「当初は学校だけで運営していたが、自治会にサポートしていただくようになり、以降、結びつきが強固になった」「学校主体の運営だった。自治会やPTAのサポートがあれば…」という声をいただいた。報告書を配布した自治会、小学校、公民館からも「参考になった」「もっとこういう情報がほしい」「一緒に仕事したい」というお声をいただいた。

◎ 課題および展望

本報告書において、小学校避難所運営における連携体制の構築に関しては、地域連携という提案をすることができた。しかし、この報告書の作成過程で、新たな疑問が生まれたことも確かである。

- ① 小学校避難所ではなく、特別支援学校ではどのステークホルダーと連携するのか？
- ② 避難所に至るまでの要援護者は、どのような避難経路、方法で避難してきたのか？
- ③ 避難所における配慮が必要と思われる要援護者、児童はどのような意思確認をされ、どの時期に福祉避難所、施設などに移動できたのか？

また、この報告書において小学校避難所の運営・受援体制の確立には貢献できたと思われるが、子どもなどの災害弱者に対する効果的な支援方法なども、明らかにしていくなかで、災害時に必要な人員も今年度明確にしていく。

次年度は、以上の報告を基に、被災地における避難所の直接的改善に向かうため、人員を直接被災地に派遣できる仕組みづくりを実施する予定である。

益城町立益城中学校における学校再開支援

事業の目的

支援対象：益城町立益城中学校

解決したい課題

1. 半壊状態の校舎での学校再開
2. 放課後支援

・熊本地震の震源地・益城町は住居の50%が全壊し、多くの子どもたちが避難生活をしている。

・益城町には2つの中学校がある。本助成金の支援対象である益城町立益城中学校は、校舎が半壊・断水し、給食センターが全壊した状態で、5月9日（月）に学校再開した。拙速ではないかとの批判もあったが、避難生活中の子どもたちの安心を取り戻すための学校の決断だった。

・半壊状態の校内には、落下物などの多くの危険物があった。また、断水状態のため、仮設トイレの設置が必要な状態だった。また、これらの対応を教職員が取らざるを得ない状態だった。

・給食を提供できないため、短縮授業を余儀なくされた。避難生活中・生活再建中の保護者にとっては、生徒が早めに帰宅することが負担になっていた。

事業内容と活動経過

1. 教職員の負担軽減（仮設トイレ支援・ガレキ撤去）

教職員の負担を軽減し、子どもたちに向き合う時間を増やすため、仮設トイレの設置作業・日々の水汲み・校内のガレキ撤去を支援した。

2. チームティーチングを通した子どもたちの見守り

学校再開直後、避難生活中の生徒には様々な不安が見られた。東日本大震災後の子どもたちの心のケアを担当したスタッフを中学1～3年生のクラスのチームティーチングに派遣し、様子を見守った。また、その様子を教職員と共有した。

3. 放課後支援

給食を再開できず短縮授業となった中、生活再建中の保護者から放課後の預かりを求める声が寄せられた。保護者のニーズがある生徒を受け入れるための放課後学習会を開催した。

事業の成果

1. 教員の負担軽減

学校の指示のもと以下の活動を実施

・仮設トイレの設置、日々の水汲み、校内の瓦礫撤去、雨除け用のテント設置

・地震でできた学校敷地内の沈下箇所を砂利を敷き詰める応急処置

・全国から送られてくる支援物資の搬入、仕分け作業

2. チームティーチングを通した子どもたちの見守り

スタッフが、中1～中3の各6クラスの数学授業に日替わりで参加

3. 放課後学習支援

2017年5月18日～2017年5月31日 益城中学校の理科室と図書室を借りて放課後学習会を実施。

熊本市内の大学生ボランティアを動員（28名）

課題および展望

▼2017年2月現在の様子

生徒の住環境：子どもの生活環境が整ってきているため、継続してきた放課後学習会へ参加する人数が減少した。2016年5月は避難所から通学する生徒が多かった。現在は自宅に戻っている生徒がほとんどだが、中には仮設住宅、親戚の家や熊本市内（みなし仮設）に新しく住み始めた生徒が存在する。特に仮設住宅や親戚の家に住んでいる生徒は十分な学習環境を確保することが難しい様子である。家計の面：建築業者が不足している状況のため、家の修復や整地にかかる時間や費用が増大している。そのため、子どもを塾に通わすことがしづらい状況になっている。

学校内の様子：プレハブ校舎が完成したため教室数も確保することができている。今年度は1か月の休校期間があったため、教員がカリキュラムを終わらせることに追われていたが、来年度はその心配もなくなると予想される。

▼今後の課題

学習環境：自立再建など、今後の見通しが見えない状況（金銭面、時間）なので、元の家に住めなくなった生徒は、日常的に十分な学習環境を確保できるようにすること。

心のケア：今後、精神的に不安定になる子どもが出てくるのが予想される。子どもたちにとって話を聞いてくれる存在や心を休めることのできる居場所を家庭や学校と協力して用意していくこと。



仮設トイレの設置



仮設トイレの掃除：離れた給水所からトイレへの水足しも行う



放課後学習会の様子：理科室で実施した放課後学習会の様子

熊本被災地、子どもと親の笑顔あふれる心のケア

◎ 事業の目的

キャンナスは、地域に住んでいる看護師が、忙しい家族に代わって介護のお手伝いをする『訪問ボランティアの会』として1996年に活動開始し、現在では100を超えるキャンナスが全国で活動している。また、支援活動充実のために2014年NPOキャンナスを設立し、「日本中に星降るほどの訪問看護ステーションを」をスローガンに、更なる活動に取り組んでいる。

東日本大地震では、延べ2万人を超える医療関係のボランティアを派遣し、現在は、社団法人キャンナス東北として支援活動を継続している。

今回はその経験を活かし、現地避難所、仮設住宅などで医療関係者と連携しながら被災者の心のケアに努め、また、各種イベントを実施することにより、子どもたちを含む被災者の方々が早く元気になってもらえるように心がけることを目的とした支援活動を実施している。

◎ 事業内容と活動経過

2016年4月14日熊本地震発生を受け、4月16日以降順次、全国のキャンナス有志と本部スタッフが益城町の避難所になっていた特養ひろやす荘に入り、そこを拠点として医療関係団体と相互協力して被災者の健康管理、公衆衛生管理、生活環境向上へ向けた活動や物資支援活動などを開始した。

日中は子どもや子ども連れの家族への支援活動、夜間帯は余震による不安、体調急変時対応など、24時間看護体制で支援活動を実施してきた。

当初は、本部から現地コーディネーターを派遣し、各地キャンナスの看護師を中心とした有志が交代で対応に当たっていたが、その後7月になり、被災していたキャンナス熊本の責任者が支援活動に専念できる体制が整い、中長期的な支援活動体制が出来上がった。7月にテクノ仮設団地が完成し、同団地内巡回を開始したが、10月の『地域支え合いセンター』開設に伴い、益城町社会福祉協議会から、正式にテクノ仮設団地での見守り支援委託を受け、現在も活動を継続している。

このように医療面での健康ケア支援活動を実施している中で、子どもたちとそのご家族が一日も早く笑顔を取り戻し、元気になってもらえるように、ミュージシャン、パフォーマーに依頼して、コン

サート、マジックショー、バルーンアートなどを開催し、また、スタッフが主体となってクリスマス会、バスケットボール交流会などのイベントを実施してきた。

◎ 事業の成果

キャンナスは、東日本大震災での支援活動経験を活かし、いち早く現地に入って医療関係者と連携を取りながら避難所での健康ケア支援活動を開始し、その後キャンナス熊本による中長期的な活動ができる体制を構築し、被災者の方々に寄り添い、心のケアに努めてきた。

その活動の中で、子どもたちを含む被災者の方々が一日も早く元気になってもらえるように、各種イベントを開催することができた。イベント内容によってはお年寄りを含む大人の方々を対象にしたものも企画開催してきたが、その中で子どもたちにも楽しんでもらえるイベントを9回開催することができた。

今回のこの成果は、東日本大震災での支援活動中に知り合うことができたパフォーマーやミュージシャンの方々から、温かいご支援をいただいたことが大きな要因となっている。

◎ 課題および展望

今後も、テクノ仮設団地内の住民の方々の健康ケアを中心に活動を継続していく中で、住民のみならずご要望などもお聞きしながらイベント開催を実施したいと考えている。



バイクトライアルパフォーマンスショー



第1回風船企画とまら〜ずさんのバルーンアート



「EVERYBUDDY STRIDER」さんによるストライダー講習会

被災保育園（幼稚園）の保育環境正常化のための緊急アドバイス支援

事業の目的

熊本地震被災後、特に被害の激しかった地域のひとつである益城町、御船町、熊本市東区を中心とした地区の幼稚園・保育園などでは熊本県内全体の6分の1に当たる115施設が休園から開園したものの、実際には園庭や園舎の一部しか使えずに子どもたちの遊びと学びの保育環境に支障をきたしている状況が課題となっていた。しかしながら、これらの園に対して、園外からの支援としては、建築士会や建築学会の建築建屋に対しての危険度判定はあるものの、保育プログラムや、園庭、建物などを総合的に判断して、保育環境全般の正常化に対する包括的なアドバイス支援が不十分で現場がかなり困窮していることが明らかであった。そのため、こども環境学会の熊本地震震災復興支援として、上記被災地の保育環境の改善についてのアドバイスを行い、子どもたちの成育環境の向上と、保育環境の立て直しを支援することを活動の最重要課題と考え、本事業の目的もそこにある。

事業内容と活動経過

こども環境学会としては、子どもたちや子育て世代の方々のPTSDからの回復に「遊び」が効果的であるという視点にたって、災害急性期よりも復旧期における支援活動内容を模索することを原則とした。現地で既に、子どもたちや子育て世代の支援活動を実践している団体などと連携・情報交換、あるいは、『熊本地震・支援団体火の国会議』にも出席し、現地の関連行政機関、仮設避難所、保育園、幼稚園、小学校などを訪問・ヒヤリングを行い、最も被害が激しかった益城町地域で、既に平常時に近いかたちで再開している保育園や幼稚園の保育環境の改善・活性化こそ、被災された子どもたちや子育て世代の方々にとっての緊急課題であると判断した。

1.第五保育所・第二幼稚園における保育環境改善緊急アドバイス
益城町の幼稚園・保育所に対しては現地を訪問し、被害状況を具体的に把握すると同時に、特に被害が激しかった第五保育所、益城町第二幼稚園については、園児の外遊びに重要な園庭や建物と園庭との間の中間領域であるテラスや縁側などの空間に沈下や破損被害があって保育環境に支障をきたしていたため、園全体の保育環境をより活性化するための具体的な空間的アドバイスをした。復旧から復興期における今後の施設改善の具体的なアドバイスを行うと共に、それを現状と計画というかたちで図面化して提示した。…以下略



被災状況調査（益城町総合体育館）



被災状況調査（熊本市さくらば保育園）



被災状況調査（益城町第五保育所仮設園）

2.保育園・幼稚園における保育環境改善アドバイスブック作成・配布
こども環境学会が行ってきた幼児の成育環境支援活動で得た知見や、会員が今まで行ってきた保育環境活性化の実践や研究成果も踏まえた視点を、熊本県の状況に合わせて再整理し、大規模震災被災地における幼稚園・保育園の保育環境を活性化させるためアドバイスブックとしてまとめた。保育環境改善のための重要な視点について、ハード面、ソフト面、それぞれについて分類することで、ハード面については、園舎、園庭、中間領域に細分化した空間的アドバイス、ソフト面については、あそびのプログラムとして、対象年齢別に細分化したあそびのアドバイスとしてまとめた。アドバイスブックは幼稚園・保育園の保育者向けに作成したAと、仮設住宅団地で暮らす子育て世代の方々や子どもたちのために作成したあそびメニュー的なBを作成した。Aは益城町と熊本市の主要幼稚園・保育園・子ども園などに、Bは仮設住宅団地に配布した。

事業の成果

本事業の成果として、前述した1の緊急アドバイスについては、益城町第二幼稚園の復興計画（園庭や中庭周りの中間領域）、第五保育所では、仮設保育所の計画内容の一部が実現し、玄関やデッキ、園庭などの整備内容に実際の改善が見られた。第二幼稚園については、園長と町との今後の復旧計画において知見が採用されていくものと考えている。

『保育環境における、あそび環境改善のためのアドバイスブック』A、Bについては、年度末での配布であるので、今後、幼稚園・保育園や仮設住宅団地で活用していただくことで、子どもたちの成育環境の活性化に、実際につながっていくものと確信している。

課題および展望

『保育環境における、あそび環境改善のためのアドバイスブック』は、保育者の被災後の心身の疲労の蓄積が懸念されているため、被災後1年が経過した今、再度、彼らの現状を調査、ヒヤリングして、更に何らかの支援策を提供する必要があるものとする。また、アドバイスブックBについては、配布するだけでなく、そのブックの使い方を提示するようなプレイリーダーを派遣してのイベントの必要性や、仮設住宅の敷地の条件によっては、日常生活環境における外遊びを誘発させるための仮設のあそび場の設置の必要性も感じる。

「自分でできる、お互いに見える、ずっとできる心のケア」教育

◎ 事業の目的

1、熊本地震後、心のケアが必要な児童生徒は2千余人とも4千人以上とも報じられている。心のケアが必要な子どもたちと“予備軍”的な子どもたちに継ぎ目や段差がなく、持続可能な心のケアを行えるように、その心のケアの担い手を養成し、持続的に育成していくことが本事業の目的である。

2、心のケアの担い手として、教員、保護者、保育者などを対象にする。彼らにストレスマネジメントの基礎とPFA（サイコロジカルファーストエイド）を含む身近な相談相手としての知識と技術を伝えることで、児童生徒の日常的なケア（Lyster and Protect）が可能になり、専門家への繋ぎ（Connect）もスムーズに行われることを目指す。

◎ 事業内容と活動経過

内容：16時間のコミュニティカウンセラー養成の講習（講義と演習）を行った。

その内訳は、ストレスマネジメント入門、カウンセリングの心、心の応急手当（サイコロジカルファーストエイドを含む）、リラクゼーションの理論と技、コミュニケーション演習、自分理解、相談者の倫理など。

方法・会場：(1) 認可保育所会議室 (2) 日本財団会議室

上記、いずれも熊本市内

時間：2日間（合計16時間）×3期

上記内容について講義と演習からなる講習会を8月、11月そして2月と3期にわたって開催した。修了者には本法人から「コミュニティカウンセラー」の認証を授与した。

講習終了後も継続的にウェブによるスーパーバイジングなどの支援を続けている。

活動経過：合計3期にわたる講習会を経て、46名のコミュニティカウンセラーが誕生した。

◎ 事業の成果

3期の講習会を経て認証された46名のコミュニティカウンセラーは認定子ども園で勤務したり、市の社会福祉協議会から福祉委員としての委嘱を受けて活動するなど、当初の目的に適ったアウトプットを得ることができた。参加者の一人は次のような感想を残した。「泣いて、笑って、大笑いして、観て、聴いて、感じて、考えて、おしゃべりして、たくさんの自分の細胞が、ごそっと入れ替わったような安心感。」

46名のコミュニティカウンセラーの中には地域のリーダー的な存在も数名含まれていて、その人たちがコアとなってこの先の講習会や勉強会の運営・開催に力を寄せていただける見通しも出てきた。

◎ 課題および展望

アウトプットとしてまだ道半ばではあるが46名のコミュニティカウンセラーが誕生した。アウトカムとして「その結果、子どもにとってどうなるか」は今後継続的に注目していく必要があり、そのためには継続的な学習会・報告会などをとおして、スーパーバイジングを行ったり、さらなる学習やふりかえりを積み重ねるなどしていく必要がある。

また、ストレスのセルフケアの普及をもたらす「ストレスマネジメント入門講座」の講師養成プログラムの受講希望者も多数出現したので、①オリエンテーション ②第1回実習とフィードバック ③第2回実習とフィードバックからなる中期的なプログラムを遠隔地熊本でどのように開催するかも検討課題である。

そして、願わくば熊本県内で200名のコミュニティカウンセラーを誕生させ、さらにセルフケアのために「ストレスマネジメント入門講座」を年齢に達した全県民に受講してもらえれば、阪神淡路大震災や東日本大震災の教訓を生かして、災害後の心の不調で長期に苦しむ者を限りなくゼロに近づけることができると考えられる。仮設住宅での生活は当分の間続く。コミュニティ内での自助・互助・共助の質と量が問われる日々はまだ始まったばかりである。



第1期開催案内チラシ



講習場面1：ロールプレイでのカウンセリング演習



講習場面2：共感性とケアの基本を体験学習するブラインドウォーク

地震ストレスにて情緒不安定な就学前児童に対する 小児はりと保護者への鍼灸マッサージ活動

事業の目的

- ・支援の対象：熊本地震被災地の就学前児童（保育園児・幼稚園児など）
- ・事業の目的：度重なる余震の影響で、家で寝ることに恐怖を感じる児童のストレス緩和を目的とする。
- ・解決したい課題：小児はりは鋭利ではない金属片にて皮膚を軽く擦過することにより、気持ち良い刺激を与え、幼児のストレスケアや自律神経調整を行う日本古来の療術で、主に関西地方で盛んであるが、九州では「小児鍼灸」の認知度が低いため、「幼児に針を突き刺す」という誤解を生じやすく、保護者に受療の不安を与えかねない。保護者が安心して子どもを託せるように信頼関係を構築しながら、活動を継続していくことが求められる。

事業内容と活動経過

上記の目的のため、下記の活動を行った。

①小児のストレスケアのための活動

6月 5日	御船昭和保育園	活動2名	受療者	小児・保護者 7人
6月 7日	御船昭和保育園	活動2名	受療者	小児・保護者 6人
6月20日	にしはら保育園	活動3名	受療者	小児・保護者 15人
7月 3日	御船昭和保育園	活動2名	受療者	小児・保護者 6人
7月 4日	旭保育園	活動2名	受療者	小児・保護者 13人
7月 4日	御船昭和保育園	活動4名	受療者	小児・保護者 7人

②小児と保育士のストレスケア活動

7月 5日	妙音寺幼楽園	活動2名	受療者	小児 18人
-------	--------	------	-----	--------

③避難者の健康被害減少の活動

7月 6日	よかましきハウス	活動2名	受療者	小児 10人
-------	----------	------	-----	--------

④小児はり鍼灸及び傾聴活動

8月 1日	旭保育園	活動3名	受療者	小児・保護者 9人
8月 1日	にしはら保育園	活動3名	受療者	小児・保護者 12人
8月 8日	御船昭和保育園	活動3名	受療者	小児・保護者 10人
9月12日	旭保育園	活動4名	受療者	小児・保護者 15人

④は3月13日まで全13回実施

⑤反省会と今後の方針についての会議

2月12日	福岡市内	活動7名		
全活動日数：21日 活動鍼灸師：9名（のべ81名） 受療者：のべ261人				

事業の成果

- ・旭保育園（熊本市南区）、御船昭和保育園（御船町）、にしはら保育園（西原村）にて、継続的に園児への「小児はり」と保護者に対する「鍼灸・マッサージ」を同一会場にて行い、保護者の気掛かりに対する助言や、地震へのわだかまりや今後の生活の不安を傾聴し、その軽減に努めることができた。
- ・活動開始当初は保護者から、夜泣きや不眠、イライラなどの症状についての助言を求められることが多かったが、3月の時点ではその殆どが消失していた。
- ・保護者の声をじっくりと聞くことで、地震の影響による幼児の情緒不安定が表在化した症状への対処ができた。
- ・園児だけでなく、保護者に対しても鍼灸やマッサージを行いながら、傾聴に努めることができたので、家庭内が明るくなり、育児ストレスが緩和し、被災者が将来を見出すためのきっかけにできた。
- ・熊本市、西原村の鍼灸師に対して「小児はり」「傾聴」の研修を行い、地元者による活動の引継ぎができた。

課題および展望

課題：

- ①当NPOの支援だけでなく、同地域には他にも県内外の鍼灸・マッサージ師による支援活動が継続的に入っていたため、被災者に対する過剰サービスにならないように、支援者同士が常に状況を見極める必要があった。
- ②保護者とスタッフのニーズに差があり、思ったように受療者の集まらない保育園もあり、早期に活動を終了することもあった。
- ③九州では「小児はり」の学術に精通している鍼灸師が非常に少ない中、複数の保育園にて7名の鍼灸師が交互に活動を行えるように計画してきたが、鍼灸師側の休日（主に日曜日）を利用した活動になり、保育園の休園日になっていたため、受療者もわざわざ来園する必要があった。加えて、園スタッフへの負担も少なからず生じるようになった。

展望：今後は育児の不安減少や、幼児のストレスケアを目的とした援助活動は、保護者が自発的に行えるようにしていく必要があると思われる。平成29年3月の活動によって、当事業は終了したが、今後は受益者主体の育児イベントに参加することによって、見守り的な活動に変更していきたい。



小児はりのシーン：金属片で軽く撫でる小児はりで、被災地の就学前児童の地震によるストレスの緩和に努めた



保護者への鍼灸マッサージ



このようなチラシを保育園にて事前に配布し、保護者に活動参加を呼びかけた

肥後っ子支援活動事業

◎ 事業の目的

共働きなどの事情により子どもだけで過ごす時間が多い家庭において、熊本地震による影響で子どもが一人で過ごす際に今まで以上のストレスがかかることが予想された。

そのような子どもたちを対象に、一時的な学童保育を開設し、学習支援や遊びを通して、子どもたちの心のケアを図ることを目的とした。

◎ 事業内容と活動経過

本事業は、7月～9月の期間で、学童保育活動を宇城市（7回）・氷川町（6回）・八代市（7回）において、合計20回実施することを計画。利用する子どもたちへの学習支援や遊びを通して、熊本地震によるストレスの解消や心のケアを図った。

当初は、小学校3年生までの子どもを対象とした計画だったが、小学4年生の参加希望もあり、4年生まで対象を広げた。

各会場とも近隣学校から会場まで当法人が所有するマイクロバスで送迎を実施したり、軽食や飲料水をこちらで準備することで、保護者の負担が無いようにした。30人程度の参加に対応できるよう準備を進めていたが、各会場とも10人程度の参加の日が多く、最も多い日で17人の参加であった。

9月に台風接近により、活動を中止した日が1回あった為、活動実績は全19回であった。

◎ 事業の成果

本事業では、教員免許・（公財）日本サッカー協会の公認キッズリーダーなどの有資格者を指導員として迎えることができ、学習・遊び両方の面において、きめ細かな対応を行うことができた。

学習面では、主に学校からの宿題を行い、子どもたちには、漢字の止め、はねなど、字を丁寧に書いてもらうよう心がけた。学習時間は、各自で設定し取り組ませた。わからない問題や質問があった時に指導員に聞きやすいよう子どもたちと積極的にコミュニケーションをとった。

遊びの面では、宇城市・氷川町は会場が公民館だった為、外よりも室内での遊びが中心だったが、カードゲームやお絵かきなどの他に、風船を使ったバレーなどの室内でも体を動かしながらみんなで

遊べる遊びもたくさん行い、子どもの笑顔がたくさん見られるように心がけた。また、夏休み中は、子どもたちの要望もあり、市民プールでの活動も実施した。八代市は会場が運動公園だったので、室内外問わず、体を動かす遊びを多く行った。

保護者からは、子どもを預かっている時間帯で、地震後の家の整理を行うことができたとの声があり、当初予定していなかった場所への送迎にも柔軟に対応することで、本事業が保護者への負担軽減に効果があったと考えている。

また、短期間ではあったが、本事業を行うことで、雇用を生むこともできた。

◎ 課題および展望

限られた人員の中、3会場で実施した為、各会場の実施回数が週1回程度となり、学童保育活動としては必ずしも多い回数ではなかったが、各会場とも平均10人前後の参加があったので一時保育としての役割はあったと考えている。また、指導員や施設の関係で、小学校の夏休み期間も15時から実施し、午前中は別の活動に参加してもらおうなどの対応をしてもらった。

夏休み後は、学校や学年によって下校時間の差が広がり、送迎を何往復もすることがあった。

現在は、余震も以前に比べて少なくなり、学校も通常通りに戻っている為、本事業の役割はひとまず終了したと考えているが、今後の実施についての問い合わせもあり、利用者のニーズに合わせて今後も実施できないか協議中である。



大阪から支援活動に来ていただいた今柳田先生と子どもたちで記念撮影



学習の様子（氷川会場）：会場に着いたら、まず勉強



遊びの様子（宇城会場）：みんなで楽しめる遊びを実施（風船バレー）

「熊本地震」で被災された方への産後トータルケアプログラム (出産後に不安定になっている、ママの心と体をトータル的にケアし、支えるプログラム)

◎ 事業の目的

- ①熊本地震の特徴である、余震が頻繁に起きることによる車中泊・長期の避難所暮らしをしている方々の運動不足を減らし、良好な健康状態を維持することである。
- ②中でも、産後のママは通常でも子どもを産んだ後はサポートが薄くなりがちなので、育児に対する不安を一人で抱えることが無いようなサポート体制の確立が必要だ。

◎ 事業内容と活動経過

- ①この問題を解決して、前向きな気持ちになるお手伝いができる方法が産後トータルケアプログラムである。産後トータルケアプログラムを一時的な支援で終わらせない為にも、まず熊本で拠点となる場所・ずっと続けて行く上で必要になるインストラクターを熊本の方で結成することに重点を置いた。
- ②運良く、誰もが集まりやすい熊本の中心地、新市街にスタジオを押さえることができ、インストラクターを希望して頂ける地元愛に溢れる熊本の方々に集まって頂くことができた。

◎ 事業の成果

- ①4月28日より調査に入り、現地のよか隊ネットさんに現状を聞きながら、当初は避難所での支援を試みたが、当時は震災直ぐということもあり、避難所での支援はかえって迷惑を掛ける恐れがあることがわかり、急遽、こちらから行くのでは無く、多くの避難所からも駆け付けてもらいやすい、熊本の中心地でスタジオを探し、SCB様のスタジオをお借りすることになった。
- ②現地の復興状況を見ながら、まずは長く支援活動を続ける為に、協力して頂ける熊本にお住まいのインストラクター候補を募集したところ、以前から産後トータルケアプログラムに興味があった方々に手を上げて頂き、7月12日からインストラクター養成講座をスタートすることができた。
- ③バランスボールインストラクター養成講座
体力メンテナンス協会の独自メソッドのひとつ、バランスボールのエクササイズの指導法を学習。バランスボールを使った、有酸素運動、骨盤調整、ストレッチ、筋トレなどを順番に身につけることができる。スタジオなどで実践的なエクササイズの指導が行える。

④産後指導士・体力指導士養成講座

体力指導士養成講座の内容に加え、周産期や産後の身体やメンタルの仕組みを、解剖学的・運動生理学・社会的に学び、産後ケアの手法を習得。産後学講座やマタニティ向け講座、産後トータルケアクラスの開講や母親学級サロンなどでの講演の活躍が目指せる。講座には「体力指導士養成講座」の内容が含まれている。

◎ 課題および展望

- ①熊本にお住まいの方々が、産後トータルケアプログラムを理解し、指導できる所まで成長して頂いたことにより、当初名古屋・東京からの支援が中心であったが、現地でインストラクターになって頂いた方々が中心になり、熊本の各地でイベントなどを開催することができた。より多くの方々に産後トータルケアプログラムを体感して頂けるようになり、あの大変な状況下で子育てに不安を覚えておられた方々も精神的な安全と避難生活で蓄積した疲れを癒して頂けるように思われる。
- ②今後も熊本のインストラクターさんたちが中心となり活動を継続して頂くことで、末永く復興支援に繋がり、当初の産後のママだけではなく、避難生活で疲れた方々にも、幅広く心と身体のケアを受けて頂くことができると思われる。
- ③平成28年9月25日(日) 午前10時～午後4時
【第2回親子キャラバンくまもと】BOUNCE PARK
震災で遊ぶ場所が少なくなった熊本で親子で1日遊んで学べるイベント・バウンスパークを開催し、多くの方にバランスボールエクササイズを体験していただき運動の大切さを知ってもらい、産後ケア普及の絵本を使っての講座なども行い産後ケアの大切さを広げていった。受講者の方で涙する人もいたりとまだまだ産後ケアはもちろん復興支援が必要と感じた。
- ④今後は、インターネットを活用して、名古屋・東京のように今回の経験で築くことのできた自信を更にレベルアップしていき、精神的・肉体的な安定だけではなく、経済的な安定も掴むことで、今以上に現地で支援を必要な方々の為に、精力的に活動して頂ける方が増えていくように、バックアップをさせて頂けたらと思っている。



バランスボールインストラクター養成講座



同左



産後指導士・体力指導士養成講座

子ども食堂 「寺子屋&ママさん爆睡カフェ」の定期開催

◎ 事業の目的

支援対象とその現状

●対象：家屋の倒壊や、2か月間で1,800回を超える余震に不安を抱えながら、車中泊やテント泊を余儀なくされておられる母子、または被災後の子育てに疲弊しておられる母子を対象とする。

●現状：エコミークラス症候群の予防対策として、足を伸ばして、ぐっすり眠る場所の提供が必要とされていた。また、余震に怯えるお子さんたちをなだめている母親自身が拭い去れない恐怖や不安でいっばいで、住まいの復旧に追われながらも、生活の再建など先の見えない現状に疲弊しきって、不用意に子どもたちを叱りつける現象が現れていた。

◎ 事業内容と活動経過

●支援の内容：

①車中泊やテント泊を続けられる方々の理由の6割は「余震への不安」。ママさん方には、足を伸ばしてぐっすり眠ってもらうことで、元気を取り戻し、家の中で寝る勇気を取り戻し、エコミークラス症候群の回避を図る。

②余震への異常な不安と、疲弊した体を癒す。発災以降、異常な生活が日常となってしまった。ほんのひと時、子どもさんから手を放し、ゆっくりとした空間で、美味しい食事と会話を楽しみ、被災前の「日常」を思い出し、先への希望に繋げ、「心の復興」を図る。

③母親の心と体を癒し、穏やかな気持ちと優しさを取り戻し、大切な子どもたちへの【心のケア】の正常化を図る。

●活動経過：

5～6月：被災地特有の「自分だけが楽をしてはいけない、もっと休息の必要な人たちがいる」という視点からか、自粛ムードで申し込みが少なかった。

6月～：避難所の先生方からの推薦や関係者の口コミ、利用者からの好評などで、だんだん利用者が増加。

6～7月：スタッフの仕事が再開し、被災後の職場状況で多忙に追われ（がれき撤去などで人手不足、忙殺的、休みなし）、スタッフ不足が顕著になる。

7月～：乳幼児の参加が多く、子ども一人一人のスタッフが必要なため運営にスタッフ不足が深刻となってきた。

※以下略、11月まで活動を実施

※特記：6月と11月に「こども食堂まつり」を開催し、100名程のスタッフによる大掛かりなイベントで「こどもの実態調査」を行った結果、被災度が高く緊急性の高い家族はイベント会場には現れていない実態が掴め、アウトソーシング型の支援が必要ということが分かった。

◎ 事業の成果

【達成できた点】

① エコミークラス症候群に陥りやすい対象者に、足を伸ばして寝

ることと熟睡の大切さを実感し、家で眠る勇気を与えることができた。

② 久しぶりの安らぎの空間で「被災前の日常」を思い出すことができ、次のステップを踏み出す勇気と元気を与えることができた。

③ 被災後、お子さんの一時預かりシステムはたくさんできたが、子どもを預けて用事を済ませている間にまた地震が来たらどうしようと思うと、子どもだけを預ける勇気が湧かなかった。「ママ爆」では親子で体を休めることができ安心だったとのこと。

④ 避難所で支給されるオムツが一日に一個の時期もあったため「ママ爆」で一人に一袋のオムツの支援(お土産)に感動して泣く方もおられた。

⑤ 支援を受けられた方が、お手伝いで「支援する側」に移行されていった。 ※一部略

◎ 課題および展望

●残された課題

① 被災後、病気にかかり、苛立ちからか暴力的な行動(親へのDV)に出る児童が現れはじめた。(症例：起立性調節障害、鬱等)

② 被災状況の酷い方は出かけられない状況(出かけたくない、鬱、引きこもりなど)に陥っておられるので、アウトソーシング型の支援が必要。

③ その場で終わる支援は支援にはならない。傾聴による継続的な被災状況の把握、専門家と協働での解決手段の模索、公的支援機関との伴走型支援など、多面的なソーシャルワークが必要と痛感。

④ 被災に伴い住まいと仕事を同時に失ったシングルマザーの中には、子どもにサイズの合わない靴を無理に履かせて足が擦り剥けて泣き出す子ども等もいた。生活再建築の一端として、一時的なシェルターや就労支援なども急がれている状況。

など課題は多数。

●今後の展望

① 29年4月1日 ひとり親支援「シンママ熊本応援団」の開始：「ママさん爆睡カフェ」の参加者をベースに、ひとり親に特化した継続支援を実施中。生活相談と食糧支援を主軸に、子どもの救済を行う。

② 29年4月1日 孤食(個食)生活者支援「子どもと一緒におとな食堂」の開始：老若男女を問わず、孤食(個食)生活者と生活困窮者が家族のように一緒に食事を作って食べる場を設け、楽しみと生きる希望を持ち、「助けて」と言い合える関係性を構築する。

③ 29年5月1日 ソーシャルワーク「くまもと支援チーム」の結成：専門家による問題解決「支援チーム」を結成。メンバーは、弁護士(法律相談)、県議会議員及び行政職員(公的支援制度の相談)、保育短大准教授(子育て相談)、ソーシャルワーカー(健康相談)、建築士(住まい相談)、ひとり親支援専門職員(就学相談、就労相談)、会計実務士(家計相談)などで、相談受付後の伴走型支援も実施。[無料]

④ 29年7月1日 みなし仮設支援「つながるCafé」の開始：頼る人も知り合いもない「みなし仮設」入居者は県内全域に点在している。各地域の子ども食堂や、各種店舗・事務所などが協働して「つながるCafé」を運営し、生活再建の課題や問題解決の一助を担う。心の拠り所となることで「孤独死」を未然に防ぐ。



車中泊・テント泊のママが思いっきり足を伸ばして眠れる部屋



ママたちが眠る前に小さな子どもたちに慣れてもらっている様子。後ろでは忙しく食事の支度中



目が覚めたらお食事タイム、子どもたちの好物!

益城の小・中学校の子どもたちへの支援 (学習支援及び必要な備品や物資、グランドピアノなどを届けよう)

事業の目的

1. 益城町木山中学校へグランドピアノを届ける。
2. 益城町木山中学校へプロジェクターを支援する。
3. 被災地の子どもたちにむけてイベントを実施し元気づける。
4. 益城町内の中学校へ栄養補助食品などの物資を支援する。

事業内容と活動経過

1. 2度の大地震で大きな被害を受けた木山中学校(益城町)では、音楽室のピアノが損壊し授業や部活動などに支障が出ていた。当団体に神奈川県からの支援者からピアノを寄贈したいという申し出があったため、木山中学校の体育館補修中は広安西小学校(益城町)にて預かりを依頼し、2度の移送を経て届けることができた。(8月9日神奈川→広安西小、2月23日広安西小→木山中)
2. 木山中学校では、体育館などで活用していた明かりの強いプロジェクターが地震により損壊した。木山中学校は震災後、益城中央小学校の廊下などを間借りして学校生活を行っていたが、普通のプロジェクターでは暗幕もないため見えづらく困っていた。学校生活に必要なものであると考え、支援した。
3. 被災により多くの子どもたちが日常生活を送ることもままならず、度重なる余震に精神が疲弊していた。そこで、少しでも子どもたちが笑顔になれる時間を提供したいと考え、イベントを開催した。(5月12日、7月17日ペットボトルでピザ作り 5月13日バルーンアート)
4. 益城町の中学校で部活動が再開された際、簡易給食のみではエネルギー不足とのことだったため、栄養補助食品と塩分不足を補うスポーツドリンクや塩飴を購入し、届けた。

事業の成果

予想もしなかった大地震に襲われ、被災者となり非日常の生活を送ることになった益城町の子どもたちが、少しでも明るい気持ちになれるような支援を目指し、それが達成できたと思う。彼らの日常の中心であった学校生活を支援することで、そこに属する多くの子どもたちの心の状態を把握し、平穩につなげることができたのではないかと考えている。

課題および展望

被災地の小・中学校へ支援を続ける中、震災により新たに発生した問題もあるが、今までも存在していた問題が浮き彫りになる部分が多いと感じた。学童保育の受け入れ態勢の不足や、家庭と学校の連携、地域住民と子どもたちの関係の希薄さなどである。震災により皆のボランティア意識が高まり、たくさんの人々の協力を得ることができた。また資金面でもベネッセこども基金をはじめ温かい支援を受けることができた。今後、震災からの復興を考えるときにこの貴重な体験をもとに、地域の基盤を学校におき、学校とのつながりを地域住民が持つことで従来よりも地域のエネルギーが循環し一体となり、どの世代にとっても安心して過ごすことのできる仕組みが作れることの可能性を感じた。また、代表が学校の教員であることもあり、学校を中心としたコミュニティづくりの大切さを改めて強く感じている。今後は、学校教育に民間の子どもたちのために何かしたいと考えている方々や、専門的知識を持ったプロフェッショナルの方など、様々な方々がもっと積極的に、そして柔軟に教育に関われるような仕組みづくりを行っていきたくて考えており、そのためのネットワークづくりを現在行っている最中である。様々な分野の方が、国連で採択された目標であるSDGsを、まずは熊本から達成させるという目標をもったネットワークづくりを行い、その中でも特に、「質の高い教育をみんなに」という目標を達成することを目指して、今後は力を入れてやっていく予定である。未来ある子どもたちを中心とした地域づくりに貢献していきたい。



2016年5月12日 飯野小学校(益城町)：ペットボトルで発酵させたピザ作りのイベントを開催 作る過程の楽しさだけでなく、非常時にも役立つ知識を伝えられる場にもなった



2016年5月13日 広安西小学校(益城町)：バルーンアーティストと楽しいひとときを届けた



2017年2月23日 グランドピアノが、神奈川県から広安西小学校を経由して最終目的地である木山中学校の体育館に運びこまれた

居場所づくりによる子どもと保護者などの心身のケア

事業の目的

- 1.震災後、安定的に健康的な食事を摂ることができない子どもたちの経済的理由や家庭環境の変化による食事不足、インスタント食品などに偏った食事による体調不良、孤食などの解消
- 2.震災後、学校の長期休校や遊び場が被災したことによる学習や遊びの機会が十分に得られていない子どもたちへの機会提供
- 3.被災によるストレスや体調不良がみられる子育て中の保護者の支援

事業内容と活動経過

1.当初の活動予定

- (1) 震災後、安定的に健康的な食事を摂ることができない子どもたちへの支援
 - ①食事及びあたたかい食事の場の提供
 - ②食育、調理、栄養指導(学校などでの食育推進イベント)
- (2) 震災後、学習や遊びの機会が十分に得られていない子どもたちへの支援
 - ①学習支援
 - ②体を動かすイベント(スポーツ、レクリエーション)
- (3) 震災後、心のゆとりを失っていると感じる保護者
 - ①親子サロン
 - ②マルシェ
 - ③傾聴活動

2.実際に行った活動

- 5月～現在：避難所や仮設住宅などでの傾聴活動…(3)-③
- 5月～現在：被災者と支援者のマッチング…(2)-②
- 7月10日：震災後 子どものこころのケアセミナー…(1)、(2)、(3)
支援者や子育て中の保護者向けに被災児童への対応を考えるセミナー：講師/上村宏樹氏(児童発達心理士)
- 7月24日：ママ向け茶話会…(3)-①、(3)-③
子育て中の母親向けに、仕事やボランティア、サークル活動など、これからやってみたいことをテーマにした茶話会
- 8月12日：おっぱい体操&おっぱいケアセミナー…(3)-①、(3)-③
授乳中の母親を中心に震災後の疲労やストレスでホルモンバランスを崩した女性へ向けた体操やマッサージ、メンタルケアなどのセミナー：講師/神藤多喜子氏(助産師)
- 10月30日：第3回親子キャラバンくまもと…(2)-②
Scbプラットフォーム主催イベントでのプリザーブドフラワーのワークショップ(講師派遣)



7月10日 震災後子どものこころのケアセミナー
子育て中の親や子ども支援者を対象に子どものこころのケアについて考えるセミナーを実施



2月18日 出張はぐくみ食堂&まさくん音楽会
親子向け食育講座(ひなまつりをテーマにちらし寿司、時短みそ汁、ゼリーを調理)及び演奏会を開催

- 12月18日：第5回親子キャラバンくまもとin嘉島クリニック…(2)-②
Scbプラットフォーム主催イベントでのプリザーブドフラワーのワークショップ(講師派遣)
- 2月18日：出張はぐくみ食堂&まさくん音楽会…(1)-①、②、(2)-②
・親子向け食育・調理講座 講師/馬原優香氏(管理栄養士)
・ピアノ弾き語りコンサート 演奏/奥野勝利氏(音楽家)
- 3月30日：出張はぐくみ食堂…(1)-①、②
地域の子ども向け食育、調理講座

事業の成果

イベントやセミナーはいずれも和やかな雰囲気の中、笑顔が多く見られ、被災親子のストレス緩和や活動意欲向上につながったものと考えられる。

また、参加者の感想や意見から被災者の要望や課題の抽出ができ、その先の活動へのステップにもつながっている。

課題および展望

1.今回目標としていた活動

- (1)①食事及びあたたかい食事の場の提供→実施
- (1)②食育、調理、栄養指導(学校などでの食育推進イベント)→一部実施
- (2)①学習支援→未実施(常設施設開所後、開始)
- (2)②体を動かすイベント(スポーツ、レクリエーション)→一部実施
- (3)①親子サロン→実施
- (3)②マルシェ→未実施(4月より実施)
- (3)③傾聴活動→実施、継続中

2.本事業での課題と今後の展望(4月現在)

- (1)については当初の目標回数実施には至らなかった。また、(2)のスポーツイベントに関しては実施できず、今後の活動内容に反映したいところである。当団体は、3月に新拠点事務所が常設施設としてオープンし、そちらで(1)-①は週5回程度、(1)-②は月に3回程度、定期的を実施予定である他、併設のコミュニティスペースにて(2)-①②(3)-①については随時、(3)-②については月1回程度開催している。(3)-③についても引き続き仮設住宅などにて随時継続していく。

熊本地震で被災した子どもらへの支援活動

事業の目的

- ・被災地域の子どもは今なお続く余震におびえ、夜は家に入れない、一人でいられない、以前より甘える、親に寄り添うようになった、などの状況にあるため、深刻なPTSDにつながる恐れがあり、早期の心身のケアが必要である。
- ・幼少期のストレスは、成人になると同様のストレスを受けやすく非行・犯罪・自死などを生み出す要因になってしまうので、早急なコミュニティの居場所が必要となる。
- ・現地の子ども食堂、被災家庭や子どもたちに、生活必需品の支援・食材などを提供することにより、「安心・安全」の居場所づくり・心身ともに落ち着く環境づくりに、現地の団体と協働で取り組む。
- ・子どもの心身の育成には、長期的な取り組みが必要であるため、中・長期(数年)にわたって、支援活動を継続する体制を構築していく。
- ・子どもたちの「助け合い・支え合い」の気持ちを育成するため現地団体と連携を図る。

事業内容と活動経過

2016年4月18日、第一弾として、被災地・熊本へ長野県産白米・紙おむつ・タオル・ワイシャツ・下着類・カップ麺・ビスケットなど150kgを発送したのにつづき、その後は、被災地からのニーズに合わせ、衛生用品、衣類、靴下、長芋、食器類など要望に合わせて必要と思われるものを送った。支援物資発送は2017年3月27日時点で7か所30回行った。支援物提供者は、企業・団体・個人を含め延べ約2,000人以上となった。

また、被災地熊本の現状視察と被災者の子どもとお年寄りが交流できる居場所として、現地のボランティアの協力を得て「信州子ども食堂inくまもと」を3か所(7月10日 西原村西原保育園、上益城郡御船町高木学童保育、菊池郡菊陽町光の森仮設団地)で、子どもや大人約500名の参加を得て実施した。一方、仮設住宅の入居者の方々には衣類やお皿や湯飲み茶わん他食器や日用品雑貨などを提供し喜ばれた。



被災地・熊本へ子ども中心の支援物資の数々を発送



高木学童保育うさぎクラブと「信州子ども食堂in熊本うさぎ食堂」1



高木学童保育うさぎクラブと「信州子ども食堂in熊本うさぎ食堂」2

事業の成果

- ①長野県から熊本県へ支援物資を発送
地震発生直後から長野県内外各地より集まった物資を、被災地支援団体と連携することにより、迅速、効率的に発送することができた。また、県内企業・個人への活動の周知によって、継続的な物資の提供の申し出を受け、現在も支援が続いている。企業・店舗ではこれまで廃棄されていた新品のお菓子などの景品を、支援ボックスを設置することで多量に集めることができ、被災地への発送に繋がった経緯があり、普及啓発・食品ロスの削減にも役立っている。
- ②熊本県で「信州子ども食堂」を開催
現地では、想像を超える被害により復興も進んでおらず、被災者・支援者共に疲労、PTSD、先の見えない不安な状況にある中、子ども食堂開催が大変喜ばれ、ぜひまたやってもらいたいとの声が多数寄せられた。また、これまで引きこもっていた仮設住宅の住民が参加し何か月ぶりかで笑顔を見たとの家族の証言もあった。応援している気持ちが伝わった手応えと共に、現地の状況を実際に見ることで、今後の支援継続を周囲に訴えていく契機に繋がった。

課題および展望

時間の経過とともに報道も少なくなり、被災地への関心が薄れていく中で、現地の状況を把握し、ニーズに合った適切な支援を、途切れることのないように継続していくこと。

また、実際に現地に行き、支援者への支援も必要であると感じられた。被災地で常に活動している支援団体からの情報収集を行い、県内の援助者とも引き続き繋がり、物資の発送、子ども食堂の開催を実施していきたいと考える。

団体概要

※2017年10月現在

名 称：公益財団法人 ベネッセこども基金

所 在 地：〒206-8686 東京都多摩市落合1-34

設立年月日：平成26年（2014年）10月31日

※公益財団法人移行日：平成27年（2015年）4月1日

役員

代表理事・理事長	五十嵐 隆	国立成育医療研究センター 理事長
----------	-------	------------------

代表理事・副理事長	福原 賢一	株式会社ベネッセホールディングス 代表取締役副会長
-----------	-------	---------------------------

理事	耳塚 寛明	お茶の水女子大学 教授（教育社会学）
----	-------	--------------------

理事	小見山 智恵子	東京大学医学部附属病院 病院長補佐・看護部長
----	---------	------------------------

監事	尾尻 哲洋	辻・本郷税理士法人 特別顧問 税理士
----	-------	--------------------

評議員

評議員	高野 一彦	関西大学社会安全学部・大学院社会安全研究科 教授
-----	-------	--------------------------

評議員	宮城 治男	特定非営利活動法人エティック 代表理事
-----	-------	---------------------

評議員	岡田 晴奈	株式会社ベネッセホールディングス Kids&Familyカンパニー カンパニー長 株式会社ベネッセコーポレーション 取締役
-----	-------	--

2017年10月発行

発 行：公益財団法人 ベネッセこども基金
デ ザ イン：株式会社 協同プレス
印刷・製本：株式会社 協同プレス



公益財団法人

ベネッセこども基金

<http://benesse-kodomokikin.or.jp>